



求道



★ 第四號

★ 第二卷

明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可
明治三十一年八月一日發行(每月一回發行)

求道第貳卷第四號目次

求道

◎惡人救濟の德音『歎異鈔』の真髓

◎信門樞機

煩悶と自覺
人類の同價值
暗中の一微光
信仰と不可思議
光明の人生

講話

◎佛誕生の歡喜

◎我等は如來の子なり

實驗

◎黒田最勝君を哭す

靈蹟

◎五臺山探勝記

歎咏

◎春興

◎短歌拾首

◎四尾連湖

◎朝

◎短詩

時報

◎釋尊降誕奉祝の聖典◎新緑新想◎巢鴨大學の信仰會◎高等師範の佛教會◎西多摩求道會◎上田求道會◎求道學舍、第二求道會、第三求道會講話題
▲信仰消息

求道學舍講話

木郷森川町一番地

每日曜午 前九時

第一求道會

(九段坂)佛教俱樂部

每月最終土曜午後七時

第三求道會

(濱町)日本橋俱樂部

求道

第貳卷 第四號

惡人救濟の德音

『歎異鈔』の真髓

宗教は惡人救濟の門戸開くるに及びて初めて絶對の威力を顯はし來る、蓮如上人曰く我はわろしと思ふ人なし、これ聖人の御罰なりと、嗚呼我はわろしと思はざるの人は首を低ふして惡人救濟の門を過ぐる能はず、既に自ら之を過ぎざれば、亦何ぞ惡人救濟の德音を味ふことを得む。既に我はわろしと思へる人は既に絶對の慈光に觸れたるの人也、聖人の恩籠を蒙れるの人也、救濟の門戸を通れるの人也、罪惡の自覺あるが爲めに救濟の德音其光を放ち、救濟の德音あるが爲めに初めて罪惡の暗黒を自覺し來る、宗教は内的經驗の事、之を外にして其一滴だも味ふ能はざる也。

近時煩悶の青年道を求むるもの結局自己の罪惡を自覺し、惡人救濟の德音を味ふに及びて初めて苦悶を脱せざるはなし、而して此德音を最も剴切に傳へ玉ひしもの之を『歎異鈔』とす。夫れ歎異鈔は絶對の救濟を與へ、佛智不思議の極所を闡明し玉ひし所に於て、文字簡淨にして筆勢雍容として迫らざる所頗る其文意に協ふ、是れ實に信仰に入るの鍵輪にして、佛智海に遊ぶべき船筏たらずむばあらず。之が爲め煩悶の青年争て之を求め、反覆熟讀其玄蹟を探らむことを想ふ、此に於てや世の道德倫理に志あるの人一たび之を繙くに及び惡人救濟の德音に驚きて、時としては風教に害なきかを疑ふものあるに至る、實に是れ感へるの甚しきもの、蓋し宗教的實驗の立場より見るに非らずむば、決して其真意義を了解するあたはざるべし、此に吾人は其要を摘みて此至大の德音を鑽仰せむと欲する也。

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をとくるなりと信じて、念佛まうさんともひたつころのおこる時、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

嗚呼彌陀の誓願不思議なる一語は歎異鈔劈頭に掲げ出されたる眼目にして全篇を貫徹する骨髓也。嗚呼不思議なる哉、不思議なる哉、或は誓願不思議といひ、名號不思議といひ、或は佛智不思議といひ、佛法不思議といふ、此不思議に接觸し來るとき、宗教の凡ての問題を解き來る也。世の所謂苦悶に陥る所以のもの、多くは自己脳裡に高潔清淨なる理想を形作り、之を以て自ら律し、亦他をも律せむとせざるはなし、然れども人世實に理想と相距ること甚し、我理想を追へば理想益々高く、我現實を顧みれば現實愈々低し、此に於てや人誰か苦悶なからむ、人生何ぞ苦痛を感ぜざらむ。然れ共此の如く苦悶し此の如く苦痛を感ずる所以のもの、人生悉く人間の力を以て凡ての問題を解決し得べしと斷定すれば也、自力を以て何事をも爲し得べしと信すれば也、人間の力を以て至上至高と考ふるものは未だ不思議の佛智を信せざる僥慢の徒也。人間は如何に風に御して天に冲するとも結局地に墮ち來るべき運命を有するもの、洵に足地を離れざる動物也、看よ、彼蒼々として無邊無碍の大虚空に遍滿する大光明あるにあらずや、既に盡十方無碍光佛の大慈悲は既に汝を覆ひ汝を護れるにあらずや。觀無量壽經に釋尊韋提希を獄中に慰問し玉ひて曰く、佛韋提希に告げ玉はく、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る遠からず、汝應に念を繋けて彼國の淨業成じ玉へる人を諦かに觀ずべしと、聖人之を釋して曰く、本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしとなりと。嗚呼吾人は此の如き大慈悲に背きて徒らに人世の羈絆に纏繞したりき、首を廻らせば大悲の光明は既に吾人の頭上に臨み玉へり、心中既に言ふべからざる歡喜の情油然として湧き來りて自ら期せずして感謝の念佛口を突き溢れ來らむとす。人世同じく是人生なり、然れども一瞬の前後何を其光景を異にするの甚だしき、一瞬前に局々として左支右吾其出づる所を知らざりしもの、一瞬の後恢廓として障礙するものあるを得ず、韋提希夫人獄中廓然として大悟して、無生忍を得、五百の侍女と共に無上菩提心を發したるもの實に是れ八萬四千の大光明の中に攝取せられたるものにあらずや。

彌陀の本願には老少善惡のひとをえらはれず、たゞ信心を要とすとしるべし、そのゆへは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたす

けんがための願にてまします、しかれば本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもあそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと云云

佛陀絕對の救濟は同一平等にして老少善惡の區別を見ず、唯佛智不思議を信するに在り。佛陀の本願は寧ろ罪惡深重、煩惱熾盛の人を救濟するを以て根本とし玉ふ、是實に佛智不思議の極所なり、而して罪惡深重煩惱熾盛の衆生は實に吾人自身に非ずや。審さに我我身を願る、何ぞ罪惡此の如く深重なる、煩惱何ぞ此の如く熾盛なる、我善を勵まむとす、然れども一小善だも爲す能はず、我惡を止めむとす、然れども一小惡を止むる能はず、面貌憔悴して顔容憊はす、屑口乾燥し、頭髮蓬亂し、音聲微細なる實に阿闍世王の境遇に在り。此時佛告玉はく、本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもあそるべからず、彌陀の本願を妨ぐるほどの惡なきがゆへにと。天來の德音は吾人の胸中を洗濯し去りて積日の苦悶を奪ひ去り玉へり、我善を爲さむと欲して之に苦む所以のものは未だ佛智不思議を信せざればなり、我惡を爲して惡に苦む所以のものも亦佛智の不思議を信せざれば也。既に佛智不思議の救濟あり、何ぞ善の修し難きを歎かむ、既に佛智不思議の救濟あり、何ぞ惡の止め難きを憂へむ。本願の不思議は猶大海の水の如し、清水流れ來るも特に其清さを加へず、濁水流れ來るも何ぞ其濁れるを加へむ、既に是れ同一鹹味にして他の清濁と善惡とを問はんや、和讃に曰く大願海のうちに、智恵の波こそかかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり、此の如く、自己を以て罪惡深重煩惱熾盛の衆生なりと自覺したる時初めて自己か誓願不思議の救濟に與れる也。若し自己已外に罪惡の衆生を認むる時は自己已外の宗教にして自ら宗教を経験せしものに非る也、若し自己にして我猶善を爲し得べしと信するものに對しては、本願を信せんには他の善も要にあらずとの德音は何等の意味を有せず、我惡を爲さずと信する人に對しては「惡をも畏るべからず」との德音は何等の感化をも與へざるべし、嗚呼此の如き絶大なる德音を口にしたりる親鸞聖人は果して如何なる自覺を抱き玉ひしか。

親鸞にをきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄にちつへき業にてやはんべるらん、總じても

て存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ、そのゆへは自餘の行をばげみて佛になりべかりける身が念佛をまうして地獄におちてさふらはこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もあよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし、

嗚呼地獄は一定すみかぞかし、此の如き沈痛割切なる自覺ありて彼が如き絶対餘地なきの信仰、即ち地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候との大確信を起し來る。昔者阿闍世王懺悔の苦痛其極に達し、佛陀無限の救濟を感じ來りて後我常に阿鼻地獄に在りて無量劫の中に、諸の衆生の爲めに苦惱を受けしむるも以て苦とせずとの大確信を生じ來る、噫一たび地獄の猛火を經驗するにあらざれば念佛の尊むべきを知るべからず、いづれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし、結局一條の活路を存せざるは是絶対の活路を生ずる所以にあらずや。此に於てや惡人正機の大德音を宣傳し王ふ、曰く

善人なをもて往生を遂ぐいはんや惡人をや、しかるに世のひとつねにいはいはく、惡人なを往生す、いかにいはいはんや善人をやと、この條一旦そのいはれあるにたれとも本願他力の意趣にそむけり、そのゆへは自力作善のひとはひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ彌陀の本願にあらず、しかれども自力のこゝろをひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生をとぐるなり、煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をれこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり、よて善人だに往生す、まして惡人はとれぼせられさふらひきと云々

論功行賞の時は必ずや言はむ、此の如き功少きもの猶且つ此の如きの賞を得たり、彼の如き功大なるもの、何ぞ賞を得ざるの理あらむやと、是れ功に應じて賞を願つる言也。之に反して凶歳にして人救助を享くるの場合を考へよ、必ずや言はむ此の如き猶食ふべきの餘裕あるもの彼が如き救助を得たり、我等貧窶一粟の餘地なきもの豈救助を賜らざるの理あらむやと。蓋し善因善果、惡因惡果は普通佛敎の根本義にして是即ち因果律の正統に效ふる所、若し單に此法則の活動内に身を處して自ら善を修して自ら立たむと欲するの人は猶本願他力の不可思議を信ぜざるの人也。作善決して惡しきにあらず、然れども未だ眼光

自己の善に止るの間は未だ偉大なる他力不思議の存在を認めざる也、觀無量壽經中淨土に往生せむとするもの九品を分つが如き確かに未だ他力に入らざるの區別なり、讀誦大乘解第一義の上上品の人も自己の行爲の恃むに足らざるを自覺するに及びて絶対他力の救濟を仰ぐこと下々品の火車來現の時其罪を懺悔して絶対他力の救濟を仰ぐと何を異らむ。大願清淨の報土には品位階次を言はず、一たび佛智不思議を信すれば何ぞ自己の善を是れ恃まむ、善を恃むの人は未だ佛智不思議を信ぜざるの徒也、佛智不思議を信ぜざるを以て自ら善の爲めに苦み、惡の爲めに煩悶す、是實に疑城胎宮、邊地懈慢に止れるもの、聖人疑惑和讃二十三首を作りて反覆丁寧其罪過を誡め玉ふもの洵に故なきにあらざる也。曰く、

不了佛智のしるしには

罪福信し善本を

佛智不思議をうたかひて

邊地懈慢にとまりて

罪福信する行者は

疑城胎宮にとまれは

佛智疑惑のつみにより

疑惑のつみのふかさゆへ

自力諸善のひとはみな

自業自得の道理にて

佛智不思議をうたかひて

邊地懈慢にむまるれば

邊地七寶の宮殿に

如來の諸智を疑惑して

たのめば邊地にとまるなり

自力の稱念このむゆへ

佛恩報するころなし

佛智の不思議をうたかひて

三寶にはなれたてまつる

懈慢邊地にとまるなり

年歳劫數をふるととく

佛智の不思議をうたかへは

七寶の獄にそいりにける

善本徳本のむひと

大慈大悲はえざりけり

五百歳までいてすして

みつから過咎をなさしめて

もろくの厄をうくるなり

罪福ふかく信じつゝ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆへに

方便化土にとまるなり

自力の心をむねとして

不思議の佛智をたのまねは

胎宮にむまれて五百歳

三寶の慈悲にはなれたり

佛智うたかふつみふかし

この心ねもひしるならば

くゆるこゝろをむねとして

佛智の不思議をたのむへし

(節 夢)

已上二十三首佛智不思議の彌陀の御ちかひをうたがふつみとがをしらせんとあらはせるなり。

嗚呼佛智不思議を離れなば吾人は一日も生息するあたはざるへし。世の理想を追ふて苦しめるもの、道徳を行はむとて苦めるもの、社會を憂ひて苦めるもの皆未だ佛智不思議の偉大なるを認めざるなり。世の惡に苦めるものは却て容易に佛智不思議を信ずべし、善に苦めるものは之を信する洵に難し、然れども苦しめるもの猶望あり、若し小善根福徳を積み得々たるに至りては遂に之を信するの期なからむとす洵に警むべき也。看よ信仰已後の生活と雖、人世の事件に苦むときは必ずや自力の心を標準として人世を律せむとするに起因せざるはなし、人生は決して既知數のみを以て打算し得らるべきものにあらざり、人生別に未知數を有する因數の在るありて豫期せざる答案を得るものなり。此未智數の存在を信せざる人は遂に人生の謎を解釋するを得ざるなり、たとひ之か存在を信ずと雖、之を忘るゝあるときは必ず苦悶に陥るを發見すべき也。若し自力の心を挟みて進むときは普通の倫理道徳と雖必ずや實行の難きを嘆くに至らむ、例せば父母孝養の道を全ふせむと欲すと雖、恐らくは其理想を満足するの期なからむ、兒心哀々益々行ひて益々其實行の不可なるを悟らむ、若し我孝養を全ふせんと云へる一點自力の心あらば結局煩悶に陥らずむはあらず。看よ觀無量壽經三福の始に孝養父母を擧ぐるにあらずや、若し我善を爲せりと云へる一片罪福の心を挾まば自力の善にして捨てざるべからざるもの、若し吾人をして極端に言はしめば、未だ絶對の立脚地を發見せず

して行はむとする倫理道徳の如きは皆是れ自力の善、虚假の行たらずむはあらず、曰く、

親鸞は父母孝養のためとて念佛一遍にてもまうしたることいまたさふらはす、その故は一切の有情はみなもて世々生々の

父母兄弟なり、いつれもこの順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり、わかちからにてはけむ善にてもさふらは

ゞこそ念佛を回向して父母をもたすけさふらはめ、たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあ

ひだ、いづれの業苦にしづめりとも神通方便をもてまづ有縁を度すべきなり云云

聖人決して父母孝養夫自身を排斥し玉ふにあらず、自力の心を挟みて父母を孝養し、自力の心を挟みて念佛するものを排斥し玉ふなり。吾人罪惡の徒決して自ら稱して孝と稱すべき程の事を爲し得べきものにあらず、一たび人絶對の立場を見出すときは自己の能く爲すなきを發見せむ、且つ夫れ念佛は佛の我に與ふる所、我探りて以て自力の功となすべきの具ならむや。然れども幸に絶對佛の光明に接觸し來らむか、一遍の念佛も報謝ならざるはなく、父母孝養も報恩の行たらざるはなし、故に聖人又曰く朝家の御爲め國民の爲めに御念佛申候べしと。看よ信仰問題としては父母を孝養する能はざるが爲めに苦悶して信仰に入るものあり、父母を怨むるが爲めに煩悶して信仰に入るものあり、而して一たび信仰に入りたるの後は皆父母の恩徳に感泣して感謝の念に満たされざることなし。今世信仰に入るの人或は病膏盲に入りて起つあたはず、或は妻子を救はむと欲して救ふあたはず、否妻背き、子失ふの悲劇に處するの人少きにあらず、此の如きは絶對佛の救濟の外亦恃むべきものなきにあらずや。曰く

慈悲に聖道淨土のかはりめあり、聖道の慈悲といふはものをあはれみかなしみはぐむなり、しかれどもれもふがごとく、

たすけとぐることはめてありがたし、また淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて大慈大悲心をもて、おもふが

ごとく衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかいにをし不便とおもふとも存知のごとくたすけがたければこの慈悲

始終なし、しかれば念佛まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々

今生にいかいにをし不便とれもふとも存知の如くたすけがたければこの慈悲始終なし、此に至りて人生暗澹として一點の

光なし。嗚呼是れ人世に對する最終の鐵案也。此鐵案一たび下りて頭上忽ち聲あり曰く然れば念佛まうすのみぞすえとをりたる大慈悲心にて候べきと德音雷の如く響き來る。かく言へばとて聖人決して現世の度生を斥け玉ふにはあらず、寧ろ聖人の濃かなる情操は禽獸虫魚に及びしにあらずや、曰くたとひ聖教を山野にすつるとも、そのところの有情群類かの聖教にすくはれてこつとく其益を得べしと、或は曰く魚肉を食すと雖之を食する程なればかの生類をして解脱せしむるやふにありたく候へ、しかるにわれ名字を釋氏にすると雖こゝろ俗塵にそみて智もなく、徳もなし、なによりてかかの有情をすくふべきや、これによりて袈裟は是れ三世の諸佛解脱幢相の靈服なり、之を着用しながらかれを食せば袈裟の徳用をもて濟生利物の願念をやはたすと存して之を着しながらかれを食するものなりと、此の如く聖人の度生に意を注ぎ心を傾け玉ふこと専らなり。されど少しも我之を爲すといへる考なし、聖教の力、袈裟の力にて衆生濟度も出來得べけれ、我計ひにて何事をかなし得む、若し親鸞の言をきいて信を得たる人あるも是固より親鸞の與へたるものにあらず、全く佛陀直接の御催なるもの、我與へむと欲すればとて與へらるべきものにあらず、與へざらむと欲するも自ら與へらるゝの人あり。故に曰く

親鸞は弟子一人もたずさふらふ、そのゆへはわがはからひにてひとに念佛をまうさせさふらはとこそ弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて念佛まうしさふらふひとをわが弟子とまうすこときはめたる荒涼のことなり
此の如く人生のすべてを擲て唯存するものは念佛無碍の一道あるのみ、然れども此一道や天地を貫き人事を盡くし往く所として碍ふるところなく及ぶ所として通ぜざるはなし、曰く

念佛者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとならば信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もあよぶことなき故に無碍の一道なりと云云

此念佛たるや全然佛陀の賜ふ所、自己の力を以て行すると謂ふ勿れ、念佛して我善を爲せりと謂ふ勿れ、一點私の心あらば是佛陀の恩寵を私するもの也、曰く

念佛は行者のためには非行非善なり、わがはからひにて行するにあらざれば非行といふ、わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ、ひとへに他力にして自力をはなれたる故に行者のためには非行非善なりと云云

聖人終に善惡の二者全く過去の宿業なりと斷言して彌陀の本願は毫も此等に障ふへからず若し衆生罪惡なくむば佛陀何の爲めに救濟の願を起し、何ぞ吾人の爲めに劬勞し玉ふの要あらむやと慰め玉ひ、最後に至りて人生に於ける善惡其物を破壊して絶對なる如來大慈の最高至大なるを示し玉ふ。曰く

聖人のねほせには善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろによしとあほしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとあほしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのこと、みなもてそらこと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにてねはしますとこそあほせはさふらひしか

此に至りて人生の最終を極め、信仰の極點を闡き、佛陀の眞實清淨を啓き玉ふ。嗚呼人生稱して善といひ、惡といふ、畢竟相對虛假の言ならくのみ、吾人稱して善といふ、果して是れ眞個の意味に於ける善なるか、吾人稱して惡といふ、是對絶の意義に於ける惡なるか、眞個の意味に於ける善惡は結局佛陀を待ちて始めて知るべきのみ。蓋し人生は是れ虛假不實の集合のみ、人は悉く煩惱具足の凡夫、世は洵に火宅無常の世界、所謂そらこと、たわこと、まことあることなきの極、何物か永久の地盤として吾人の立脚地となすことを得べき、此間千古明らかなして極なきは獨り無限大悲の光明あるのみ。此の如く人生のすべてに満足するあたはずして初めて無限大悲の光明を仰くを得たり、此に至りて所謂善もほしからず惡も畏るへからざる境に達し唯眼中に映じ來るものは本願不思議の救濟あるのみ、實に是れ念佛のみぞまことにてあはしますと宣へる靈境ならくのみ。此大德音の力を以て人世如何なる苦境か解脱するを得ざるべき、人間如何なる煩悶か破壊せられざる事あらむ、吾人は信樂開發の一念唯佛陀大慈の足下に感泣し奉るある耳。

已上叙する所、歎異鈔の眞髓にして、惡人救濟の大德音なり、而して此大德音たるや罪惡深重煩惱熾盛の衆生なりといへる

自覺あるにあらざるは決して味ふこと能はざる也。否罪惡深重煩惱熾盛の衆生たることを自覺するものは此の如き偉大なる徳音を被るに非ずむば到底煩悶の境界を解脱するあたはざる也。蓋し宗教の事佛と我と二者あるのみ、吾人罪惡の懺悔は眞摯佛陀に對する告白也。佛陀救濟の德音は煩悶苦惱の吾人に對する慰籍也。故に佛陀は此の如く絶対の慈愛を垂れ玉ふにあらざれば佛心を顯はし玉ふことあたはず、吾人亦徹頭徹尾罪惡の結晶たることを自覺するもの、此の如き大慈悲を被るにあらざるは遂に心を安んずるあたはざる也。實に是れ人間の凡てをすて、佛心に融合し、相對の凡てを脱して、絶対不思議の佛智に投入る初一念の状態なるもの、親鸞聖人釋して曰く、一念といふは是れ信樂開發の轉刻の樂促をあらはし、廣大難思の慶心をあらはすと。

既に一たび無限大慈の光明に接觸して、絶対佛陀の聖懷に入る。此に於てや人生到る處光明の透徹せざるなく、世界何物か佛陀の恩寵を蒙らざるものやある。父母妻子兄弟皆佛縁の契ならざるはなく、一領の衣、一疊の席皆是南無阿彌陀佛ならざるはなし。此に於てや信仰已後は皆佛陀慈光の中の生活にして、造次顛沛佛陀冥見の下に行動せざるはなし、是實に信後生活の活力にして偉大なる自信と健剛なる内的制裁力を持來すもの、邪念内に萌すときは佛陀の冥見に愧ちて其心を謙へし、瞋恚内に燃るときは佛陀の和顔愛語の爲めに忽ち其炎を滅され、我慢頭を擡くるときは佛陀の慈悲忍辱の爲めに自から柔和從順の心を生じ來る。固より吾人佛陀に對するときは永久罪惡の衆生たらざるなく、始終感染の凡夫たらざるはなし、然れども幸に佛陀冥々の照鑑あるが爲めに善に就き惡を去るの大益あるのみならず、惡に抵抗せず、怨に復仇せず、逆境に處して却て長へに佛陀無限の恩徳を感謝し心神平和の境に遊ぶ所以のもの豈不可思議の力にあらずや。故に信仰已後の生活は慚愧と感謝の繼續にして我善を爲し惡を去ると云へる自覺あるにあらざるべしと雖、日常生活の實際に於ては信仰は吾人行爲の上、に於ける大なる制裁力たるのみならず、忍耐、寛容、感謝、満足、歡喜、從來嘗て經驗せざりし萬徳の源泉たらずむばならず。吾人は斷言す信仰已後の生活と雖、罪惡深重煩惱熾盛たること依然として舊の如し、唯此の如き罪惡の徒たることを自覺して慚愧の情起るに至れること是不可思議の事實にあらずや、又他人に比して我善を爲し徳を積みりと云へる思想なかるへしと雖、若し佛陀

の恩寵を蒙るにあらずむば猶如何なる惡に沈淪せしや知るべからずと絶叫せざるものなけむ、若し第三者の地位に立ちて之を觀察せば必ずや大なる變化を認めざる也。若し我信仰あるが爲めに恣に惡を爲すべし、善を修するの要なしとして放縱の生活に入るものありと言はば是れ眞實の信仰にあらざる也。歎異鈔の上にあはれたる親鸞聖人の惡人救濟の德音を拜したるの人は未燈鈔の上にあはれたる同聖人が信仰已後の生活につきて垂れ玉ひし慇懃懇切なる慈訓を拜し奉るべき也。曰くもとは無明の酒に酔ひて貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみこのみめしあふて候つるに、佛の御ちかひをさしはじめしより無明の酒もやう／＼にすこしづゝさめ、三毒もすこしづゝこのますして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候をか、しかるになを酔もさめやらぬにかさねて酔をすいめ、毒もさえやらぬに、なを毒をすいめられ候らんこそあさましく候へ、乃至くすりあり毒をこのめと候らんことはあるべくもさふらはずとこそれば候へ候、佛の御名をもさし念佛を申してひさしくなりてればしまさん人々は後世のあしきことをいとふしるしこの身のあしきことをいとひすてんとおほしめするしも候へしとこそおほえ候へ、はしめて佛のちかひをさしはしむる人々のわか身のわろく心ろのわろさをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんといふ人にこそ煩惱具足したる身なれば、わがこゝろの善惡をばさたせずかへたまふとは申候へ、かくさしてのち、佛を信せんとおもふこゝろふかくなりぬるには、まことにこの身をもちとひ、流轉せんことをもかなしみてふかくなりぬるには、阿彌陀佛をもこのみまふしなんとする人は、もともこゝろのまゝにて惡事をもふるまひなどせじとおほしめしあはせたまはばこそ世をいとふしるしにても候はめ、また往生の信心は釋迦彌陀の御すゝめによりてたこるところをみえて候へば、さりとともまことのこゝろおこらせたまひなんには、いかてか、むかしの御こゝろのまゝにては候へき。

嗚呼惡人救濟の德音は人間の地層を破壊するの火藥也、信仰以後の生活は絶対の地盤より送り出づる清泉也、倫理學者の虞の如き杞憂に過ぎざる也。然れども宗教は佛智不思議の地盤に立てるもの、彼の倫理學者か人間善惡の地盤に立て論するとは根本的に立場を異にするを知らざるべからず。若し宗教の見地より之をみれば所謂疑心自力の行者なる者、一たび「我はわろし」と云へる自覺を生じ來らば何人が惡人救濟の德音に感泣せざるものあらむ。聊か信仰の實驗を披瀝して歎異鈔の秘奥を鑽仰する此の如し。

信門樞機

煩悶と自覺

煩悶は決して信仰の必要条件にはあらず、然れども、從來第三者に立ちて宗教を観察したるもの、將に第二者の地位に移らむとす、是何等かの動機なかるべからず、而して人苦悶の状態に陥るとき正しく此變動來る。抑々宗教の根底は人生の自覺より起る、釋尊は四門を出て玉ひし時老、病、死、出家、を見玉ひしより起り、親鸞聖人の求道は叡山修業中の憂悶より來る。故に後日釋尊四諦を説くに苦諦より起り、眞宗先づ罪惡の自覺より説く。然るに後代單に之を教理として、第三者の地位に置きて冷かに苦諦若くは罪惡を説く。是れ人生の觀察にして、未だ自覺に到らざる者、然るに人煩悶の境に陥るとき、從來恰も他人の境遇の如く説きつゝありし人生觀は正に自己心中の自覺と變し來る。若し不眞面目に宗教を口にして之を心にせざるものに對しては、一たび之を苦悶に陥し入るも可なり、故に苦悶は信仰に入るの動機なり、自覺を促すの鞭撻なり。

人間の同價值

信仰の前には人間の價值は同一なり、若し倫理よりみれば善惡の區別あり、地位よりみれば貴賤貧富の別あるべけれど、苦悶の状態に陥るときは同價值なり。此點に至りては親子に代るべからず、子親に安んずるあたはず、自覺の外は之を救ふに由なし、かくすべての社會事情を没却し去るのみならず、苦悶其もの、原因と性質との種類すら没却し去る、時としては高潔なる理想を抱き之を實現出來ざるが爲めに苦悶せる人もあるべく、實際罪惡を犯して良心の呵責の爲めに苦悶せる人もあるべく、道德を實行出來ずと云ふて苦悶せる人もあるべく、病氣に襲はれて苦悶せる人もあるべく、境遇の不幸の爲に苦悶せる人もあるべく、他人を怨恨して苦悶せる人もあるべし。若し道德の眼光を以て見れば頗る感動すべきものと卑下なるものとあるべく、普通人情よりみれば同情すべきものと嫌惡の情を起すべきものとあるべけれど、信仰の眼光よりみれば其價值皆同一なり。寧ろ煩悶の深さだけ夫れだけ同情を表すべき也、如何なる罪惡の人と雖も其罪惡の爲めに苦悶する人は最も同情を表す

べきものにして善人にして善を誇るの人よりも自覺に近きものなり。是れ宗教の門には人類の同價值を認むるのみならず、善人猶以て往生を遂ぐ況んや惡人をやと云ふ所以也。

暗中の一微光

人間煩悶に陥るときほど眞面目なるはなし。故に信仰の經驗を以て見るときは必ずや一點絕對の光明閃けるを認むることを得べし、是れ實に一點の微光なり、然れどもやがて是れ光輝赫々として宇宙を照すもの、而して彼自ら之を覺知せざるなり、是實に佛陀の恩寵なるもの、須らく全力を傾注して覺醒を促すべし、此に於てや絶大の自覺を生じ來る。

信仰と不可思議

佛と云ひ、絶對と云ひ、從來は一種の言語に過ぎざりしもの、今や忽ち自家頭上に輝き來る。從來人生と共に第三者に置きて觀察したる佛陀なるもの一瞬の間に第一者の地位に立ちて嚴かに臨み玉ふ、豈不可思議の感に堪へざらむや。故に宗教を第一者に措きて觀察するの人は不可思議を説くも之を認知することなし、既に第一者として我救濟を被れりと感ずるに及びて不可思議の感想横溢して止むべからず、奇蹟も信すべく、經典も信すべく、光明をも拜すべく、化身をも觀すべし。されど此の如きの不可思議は決して信仰として要點にあらず、吾人罪惡の人一たび佛陀の救濟に遇ひ、昨日の苦悶の我忽爾として今日歡喜の我となる、是れ冷暖自知せるの不可思議にあらずや。蓮如上人曰く、我不思議なることを知る、凡夫が佛となるの不思議なることを知る。

光明の人生

既に救濟の不可思議を認め來る、是れ光明の中心なり、既に中心を生じ來る、人生到る處其光明を以て蔽はれざるはなし、稱して不思議といひ、絶對と云ふ、何物か其光明中に入らざるやある。回顧せば過去の苦悶全く信仰に導かるゝの道路にして人生の苦樂皆佛陀の我に賜ふ恩寵たらざるはなし、八萬四千の大光明に攝取し玉ふといふ、是實に光明の人生觀を生じ來る。

講 話

佛誕生の歡喜

(求道學舍講話)

近 角 常 觀

本日の題は「佛誕生の歡喜」といふのである。御存知の通り昨日は四月八日、釋尊降誕の聖日に當りました。夫れで東京を始め諸方の寺々に於ては何れも賑々しく其の御祝ひを營まれたことである。殊にこの日は昔より、佛降誕の時、色々奇瑞が現はれ甘露など降つたといふ意味から、何處でも甘茶などを立て、慶ぶ。亦大日本佛教青年會では其第十四回釋尊降誕會を今年は兩國廻向院に於て舉げられた。早いもので、青年會が其第一回を始めてから、今年で十四年になる。第一回の時は私は高等學校に居りましたが、此の時は各學校に持ち別れて銘々に盡力した。これが抑々の始めてである。この年は唯「宇宙の光」といふ小冊子を配分した丈であつたが、翌年は大學講義室に於て隨分盛大に舉行した。已來引き續きて第十四回と迄來たのである。今日では、我々が四月八日を祝ふのは、昔からの事のやうに思はれて、とても十四年來とは考へられぬ迄になつた。この十四年間の事を私一人として考へて見るに、今更ながら色々喜ばせて頂けるのである。

順に、病者は癒え、人は親切に相語り、馬は嘶き、象は優さしく歩み、音樂は自ら奏せられ、天明らかに、風靜かに、雨降り、水畔かに、鳥高く飛ばず、河流を停め、海水新に、世界到る所蓮華紛々として降る。菩薩胎中にある恰も器中油を盛るに似たり。在胎十月、嵐毘尼園中、花寶鬘々として一簇雲の如く、雜色の蜂、遊禽の群、婉轉として花間枝上に飛翔せるの時、人繞らずに幔幕を以てし、佛陀は正しく降誕まし、けり。實に四月八日なり。

梵う謂ふ具合に書いてある。此のチャータカは釋尊の傳記中で最も古い傳記であるが、一讀直ちに當時の如何に安らかで有つたかを想ひやる事ができる。而して此の何とも謂へぬ平安の有様は、佛誕生の時にのみ現はれたものでは無い。卅五歲降魔成道の際にも、矢張り此と同じ奇瑞が現はれて居るのである。即ち釋尊が菩提樹下の靜觀に於て、今迄の非常なる苦痛が治まり、惡魔が次第に退散して、成道正覺を御成就なされた。其の時の有様が亦此と同じ様に顯はれてある。チャータカに書いてある所を御話して見ると、佛陀が彌々正覺を御成就になつたは、夕日が猶ほ地平線上に残つて居る頃であつた。この時三千大千世界は、俄かに光明を以て輝き、歡喜の爲めに叫び出した。そうすると忽ち世界の東の涯に大小種々の旌旗が現はれ、見る間に西の涯へ沈む。亦西より現はれて東の涯に入り、南より現はれては北に、北より現はれては南に隠れる。如斯くして此等の旌旗は終に八方より天の中空へ集つて、更らに空中に於て再び大地へ消えてしまつた。夫れから宇宙間の有りと有らぬる花木は、皆其の花を開き、木の實の

西洋に参りました時は同志の方々と共に伯林に於て日本花祭といふを營ませて頂いた。亦思ひ返して見ると、丁度九年前、私の苦悶の段々と激しくなつたのは丁度九年前明治三十年の降誕會の頃からであつた。其前日前夜、明日は彌々降誕會といふので友人等は皆喜こんで居る。自分ひとりには氣が鬱して如何にしても喜ばれぬ。却て友人等の愉快がつて居るのが私には不愉快でたまらなかつた。其時のことなど今もよく心に残つて居る。夫々思ひ來りて昨日は無量の感に打たれた事であつた。

偕て此の四月と云ふ月は、學生に取つては最も愉快な月である。或は此の四月を以て一學校を卒はられた方もあらう。或は前學年を終へて、新らしき學年に進まるゝもあらう。私は先達て雜誌を書きながら、色々考へつゝ、チャータカを繙いた。このチャータカといふは釋尊の本生譚を書いた書物であるが、佛降誕の處など、實に難有く書いてある。今日の題は即ち夫れから思ひ附いたのである。其處の文は今度の雜誌(第參號)中にも引いて置いたが、釋尊が摩耶夫人の胎中へ御宿りなされ、彌々御生れになつた時の有様に就いて次の如く記してある。

摩耶夫人夢に四天皇に伴はれて雪山の上に遊び、阿耨池に浴し、銀山に上り、金堂に入りしが、白象金山より下り來りて白蓮華を捧げ、夫人の床下に三禮して右脇より入る。此の時諸の奇瑞あらはれ、地震ひ、花開き、盲者は眼を開き、聾者は聲を聞き、啞者は語り、跛は行き、囚人は擇され、地獄の火は滅し、餓鬼は食し、猛獸は柔

なる樹は皆其の果實の房を以て飾られ、そうして凡ての樹の枝や幹や、臺の類に至る迄が、悉く花を以て包まれた。其時空中よりは蓮華が紛々として降り出し、地上にありては百合の花、片々として自然に相翻つた。やがて大千世界は廻轉を始めて、其の状或は一團の蓮華飛散するが如く、或は美妙なる一環の花輪のやうであつた。又大空は光りを以て一杯に輝き、地獄は此の時初めて其の暗を去つた。亦大海の水は此の時甘味を生じて地底へ減退し、凡ての河水は此の時其の流れを停めた。盲者は此の時明を得、聾者は此の時聲を聞き、跛者は此の時歩行を得、そうして凡ての囚人は此の時其の鎖より釋されて自由を得るに至つた。」と大略先づ如斯くある。兩方共に大した相違はない。等しく偉大なる佛陀の御心を顯し、謂ふべからざる平安の儀があり、と現出する心地がある。私は此等の文を讀むと實に何とも言へぬ難有い感じになる。が私の思ふには、單に此れ丈の感じに留めては惜しい。更らに一步を進めて、御互に自分の上に直接味はせて頂き度と思ふのである。夫は無論此の文句の通りで充分に難有い、他に道理筋道を附けぬかて、此の儘で實に難有い。けれども信仰の上から見れば、單に奇蹟不思議とのみ思はなくして善いのである。實に此等の文は、偉大なる佛陀の御力より生ずる眞實の平和の有様、心の和ぎを得た其有様を示されたものとして頂く事が出来るのである。私も此度は此等の文に就て熟々と味はせて貰つた。單に誕降會を喜ぶといふ丈の事ならば、古來より幾多の人が色々やつて居る。去りながら唯二千年前に斯る不思議が起つたと奇蹟的或は詩的にのみ考

へた丈けでは未だ足らぬ。更らに進みて其の時の喜びを自身の上の新に感じさせて貰つてこそ、始めて降誕會を喜ぶ眞實の味がある事と思ふ。私も多年の間降誕會に出會ひ西洋てさへも、やつて来た。けれども今また此等の意味に氣付かせて貰つて見ると、一層に喜ばしい。どうかして其の十分の一、二十分の一なりとも、せめては其の心懸け丈けなりとも爲ねばならぬと感じて、私も今年は更らに喜びを新にした事である。

諸君が御存知の通り昔の詩に「閻浮八萬四千城、不動三千戈、太平」と謂ふがある。有名のものであるから誰でも能く知つて居る。娑婆世界多數の都城、干戈を動かさずして皆一様に太平に治まると謂ふので、矢張り偉大なる太平の様が現はれて居る。亦大无量壽經の中には「天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國豐民安、兵戈無用、崇德興仁、務修禮讓」の文が有る。皆同じ意味で、其の平安の状は何とも謂ふ事が出来ぬ。今日は日露戰爭の最中で、我が國威は彌々輝き、國家は増々隆盛に進むて居る、世界平和の上より見て、此上なく喜ばしい。併し猶ほ干戈を動かすと謂ふ丈けが、眞實の處より謂へば、頗る残念である。克く思へば國家の戰爭も個人の争ひも根底に於ては何等の相違も無い。人と人との心中に於て、互に恨み合ひ憎み合ひ、夫れが大きくなつたのが戰爭である。其の人間の争ひのとはと謂へば何時でも隔て、心である。それでこの根本の我々の内心が治まらずしては、とても眞實の平和を見ることは出来ぬ。我々の淺ましい心、悪い心が根本的に破壊せられて始めて眞實の平和は來るのて

四月八日の佛誕生である。此の佛が迦毘羅城内に身を現じ偉大なる慈悲を形を以て御示し下された。此れが我々信仰を得た根底である。いつても申す親鸞聖人は此れに就て如何に仰せられたか。

釋迦如來かくれまし、二千餘年になりたまふ、
正像の二時はをばりにき、如來の遺弟悲泣せよ、

涅槃の雲に御隠れになつてから已に二千餘年、正像の二時は疾くに去つて今は末法の世の中である。其の御姿は今や拜することが出来ぬ。御跡を追はんとして追ふ事の叶はぬ我々である。

末法五濁の有情の、
釋迦の遺法ことごとく、
大集經にときたまふ、
龍宮に入りたまひにき、
闍諍堅固なるゆへに、
この世は第五の五百年、
末法第五の五百年、
百法隱滞したまへり、
この世の一切有情の

如來の悲願を信せずは、
行證かなはぬときなれば、
佛御入滅より年處隔たりて、今は闍諍堅固の淺間しき末法である。形で御示し下された御慈悲、御力、夫は拜む事が出来ぬ。去りながら仕合はせにも悲願のみは今も残つて居て下さる。この悲願を外にしては。我々の助かるべき道は一も無い。末の末迄此の悲願を頼めとの御示である。我々が降誕會を喜ぶのでも唯二千年前の其事を喜ぶ丈けではいかぬ。銘銘の心の上へ新らしく其喜びを覺ゆるが肝要である。我々の胸中へ親しく佛の顯はれ給ふが佛誕生の慶びである。蓮如上人は勸修寺の道徳が正月元日御前へ參へられた時に、すぐさ

ある。此の意味から段々と、佛誕生の有様を味はふと彌々難有い。種々の形容を以て書いてある通り、盲者は明を得、聾者は聲を聞き、地獄の火は滅して、囚人は皆な釋される。そうして人は皆親切に相語り、猛獸迄が柔順に歩む。此の書き方は實に味ひが深いのである。而して此の深い味ひをば實に佛は我々人生の上を下さるのである。我々が自分の力で此の味ひに至らうとしても夫は出来ぬ。去りながら佛陀は我々をして此の味ひに連れ込んで下さるのである。先きにも申しした私の九年前の苦悶と謂ふのも失はり人間の妄想に過ぎぬ。自分から人と隔て心を作り、自分から孤立になつて苦しんだのである。何が苦しい、何が淋しいと謂つても、内心の苦悶に勝る事はない。其の苦し味は如何にして去る事が出来るか。自分の心で如何程力み、如何程勵み、思はず居らう、隔てず居らうとすればする程増々苦し味が増して來る。其の苦しい心が彌々和いて來る時は何であるか。私の經驗に據つても、佛陀が身に沈み、と難有くなり、御慈悲が漸々と解かつて來、其の大悲が心中に知れ渡つた時、今迄の苦悶が自然と去つてしまつたのである。其の後、多くの人々に此の御慈悲を御話すると、皆な御安心なさる。夫等の人は何處で安心さるかと謂ふに、自分に務めて行つた方は一人も無い。自分に務めると云ふは、唯苦を増す計りの事である。唯佛陀の慈悲これ一つが感ぜられて始めて皆喜ばれるのである。實に佛陀の慈悲ばかり難有い事は無い。私共は二千年前の佛陀が今も御照覽下さると思ふと、譯なしに難有くなる。此の偉大なる佛陀の慈悲が始めて此の世界に姿を現はされたが、即ち

ま「道徳はいくつになるぞ、道徳念佛まふさるべし」と仰せられた。亦或る人が歳末の御禮の爲め御伺ひせられた。其時上人は御覽になつて「ことごとくし歳末の禮かな、歳末の禮には信心を取りて禮にせよ」と仰せられてある。誕生會を喜ぶとしても、我々は此の心懸けを忘れてはならぬのである。喜びを盡すは誠に善いが、夫が形のみであつては、なか／＼殘惜しい。眞の佛誕生の歡喜といふは、形に現はせられた慈悲の御姿を、我々の心中に直接味はせて頂くのである。佛誕生の眞意を各自の心中にひし／＼實感させて貰ふのである。

茲迄御話すれば、この已上は信仰の御話になるから、例によつて今日も實例を申して見やう。私は此頃ふとした御縁で巢鴨の監獄へ參つて佛法の話をして居る。夫で此れは監獄に於て、一人の方が信仰に入られた經過であるが、其人始めは亂暴書生の群に加はつて壯士の様な事をやつて居つた。て其頃から一種奇妙な思想を抱いて、強者は弱者を倒す權利がある、強いは何を爲ても善いものだ、と謂ふ様な考を持ち、何事でもいさなり遣り遂げる風であつた。此んな具合で遂には監獄に迄はいられたのであるが、こう謂ふ人であるから學問上の心得等も随分とある。一日私が參りました處其人の話さるゝには「私は嘗て或る方より一席の談話と承はつた。其の方の仰せには、安心の道は到底理窟ではいかぬ、靈魂の有無など如何程考へたとて、夫は何んにもならぬのである。今我々は現に毒矢を以て刺されて居るのである。矢の理窟など彼是れ詮探すべきそんな餘裕は無い、直ちに進んで其の毒矢を抜き取るが即ち信仰の問題であると謂ふ御教訓であつた。偶

然この語に氣が止まつて見ると、私は今迄理窟を謂つて居たが、さつぱり駄目である、苦しい時は如何に致しても矢張り苦しい。去りながら自分は未だどうしても自分を罪惡と思ふ事が出来ませぬ。凭う謂ふて私に聞かれた。此の時は私もあり、佛の御言葉は承はる思ひが爲た。亦云はる、には「私は自ら偽善をやつて、今日に至るも猶ほ實名を隠して居る。飽く迄實名を隠し切つて、出獄の上は、親の爲め、是非とも再び家名を挙げ成功を爲ねばならぬ」と考へて居る、成功の爲めには第一に意志が強くなつてはならぬ。佛教を信ずると何となく意志が弱くなりはせぬかと思へるが、此れは如何なるものであらうか」との尋ねである。其處で私は、決してそんな事が有るもので無い。眞の成功と謂ふは、金銀名譽の分量と思ふと非常な間違である。成功の眞の意味は、根本的に今迄の心を翻して佛の心と入れ代はり、生れ變りて働く事である。練瓦石を積む如く着々として眞地目に進むのである。第一夫れては成功の心持ちが違がふ。從來の誤つた考は、根底より破壊して、改めて小さき處から地盤を上げて行くのが眞の成功である。意志の強いと謂ふ事は、自分で我慢張る事では無い。眞實に意志が強いと謂ふは、自分の信じた處を如何なる風波にも動され無い其の事である。假し人生の事が如何に有らうとも、眞實佛の御力をたよる者ならば、疑はむとしても疑ふ事が出来ぬ。是れが眞の意志であるといふ意味を段々と話した。其人非常な熱心の態度を以て聽いて居られたが、話が了ると、大層喜び出されて「今迄私は大變なる心得違ひであつた」と喜ばれた。次の日に行きました處此度は初から

喜こんで「昨日の御話で今迄の非が能く解かりました。今朝顔を洗うて居りますと、どう謂ふ事か俄かに嬉しくなつて、佛の御力が少しも疑へぬ様になつた。其の時我知らず自然と念佛が口へ發して仕舞ひました。實は私は今日迄念佛など馬鹿な事と思つて、笑つて居りましたが、今朝は夫れが獨りてに口へ浮びました。夫れて此れこそ彌々佛意の御催しと思ふと増々喜ばしくなつて來ます。去りながら其の後は動もすると此の歡びが續きかねる。今朝も仕事場へ出ますと矢張り前の如くには行きませぬ故、此後は是非修養が必要と思ひます。此から専心修養を積みましたら屹度金剛堅固の信仰に到れると考へる。こゝろふ有様で、私も聞きながら言ふべきを知らなかつた、唯念珠をつま繰りながら、難有く承はつた事である。其處で私は申して「今お前は此から修養して金剛堅固の信仰に到ると謂つたが、其は少し言葉が違がう。今朝お前がしみじみと感じた佛の御慈悲は、お前は夫を永久に忘るゝ事が出来ぬのである。是れが即ち金剛の信心である。此からも同じく其の心で喜ぶのである。決して自分の力で修養して善くなるのでは無い、佛より給はつたが即ち金剛の信心である。すると其人は彌々歡ばれて「今こそ確かに安心が出来ました。私は已前禪宗の書籍なども見ましたが、到底解かりませぬでした。唯今より改心して、直ちに本名を申し出様と思ひます。四年間こゝろして偽名を名乗つて居つたは、唯成功の爲であつたが、今日はすつ切り心を改めました。亦私は國に母が居りますが、今日迄私の居所を隠して置きましたから、今では私が如何になつて居るか、母は少しも知りませ

ぬ。實は母に告ぐるに忍びなかつた故で、今日迄長々辛棒して來たも、唯此の母一人の爲めてした。此の母の爲め私は且暮成功を忘るゝ事が出来なかつたのである。併し今日は從來の考へを翻して此より急ぐに、母の許へ手紙を書き、身は如斯き有様に居るも、心は唯今如斯く安らかなつた詳細を逐一申し送らうと思ひます。母は私の現狀が知れて、悲みの中にも必ず安心して呉れると信じます。私は親を思ふと如何なる苦痛にも耐ゆる事が出来る。私が東京へ出たは拾三の時であつたが其時も色々の問題が有つた中を、母の力て出られたのでありました。其の時母は私に小さき佛像を呉れまして、若し苦しい事が有つたら此の佛像を我れと思へと申して、行李の底へ入れました。墮落して居ります間に他の物は皆な賣り飛ばした。此の佛像だけは何故か残しまして今も弟の處へ預けておきます。今私が斯の如く佛の御慈悲を喜ぶ事が出来たは全く親の言葉が生きたのである。私にはもう佛と親とが一つになりました。今日身の零落を告げても、佛を喜ぶと申したら、母は如何程喜ぶか知れませぬ。と言つて歡喜が心底より湧き出るといふ有様である。夫から已後其人は監獄内に居ながら始終喜こんで居る。そうすると佛の大願業力は何處迄御手強いかわからぬ、其狀ながら嬉し相なので、一所に仕事して居る者迄がいつの間にか自然と、求道心を催ふして來る。其の中の一人の如きは私の許へ來つて、親の事が氣にかゝつて堪えられぬ」と訴へると謂ふ有様になつた。其の人間の如き聽いて見ると犯罪の動機が實に氣の毒でならぬ。唯親の病氣に藥を與へ度い計りに惡心を起し、夫れが不圖した行懸り

て強盜罪になつたのだ相である。前に申した人の如きは、十三歳家を出る時に、既に佛縁が出来て居る。其れが長々の間潜んで居つて三拾近くの只今發したのに相違無い。此れ程種々と社會に練まれ、遂には監獄へ迄來た人の心にどうしてかゝる美はしき心が現はれたのであらうか。此に至りては唯不可思議願力を仰ぐより外はないのである。此の人の心中は極めて明了である。改むべきは改め、止むべきは止め、表裏なきに到つて始めて眞實の成功が出来るのである。此れに於て立派な貴い人間が生れた。否な佛の御心が貫徹したのである。斯くの如き意味から始めに申したチャータカの文を味ふと今更らに難有い。罪人は鎖から釋されるの語など、々々新しく耳へ響いて來る。今の例の如き肉體は監獄内に繋がれて苦しみながらも、心は既に永劫の繫縛より脱したのである。こゝろ謂ふ風に味へば一々の句皆無量の意味を生ずる様になる。盲者は眼を開き、聾者は聲を聞くなど、頗る味ひが深い。夫は無論御誕生の當時此等の事實が有つたのであらうか、又こゝろ謂ふ具合に頂くのも難有い。行誠上人は晩年耳が聞えなくなつた時、自分は先づ耳から往生する、なしくづしの往生であると喜ばれた相である。斯くの如く一人々々の心の上に佛が現はれて下さる故、何を以て降誕を祝するかと謂へば、各自に此の心になつて慶はせて頂き度い。こゝろして馬も嘶き、象も優さしく歩む安らかな思ひにさせて頂くのである。善きも善きにて頼みにせず、惡も惡にて心とせず唯何事も佛に任かせて進むのである。佛の偉大なる御力を思ふと何も自分で我慢ばる事はいらぬ。亦我慢張る力は少しも無い。我々が此の世に有る間

はいつも申す、

小慈小悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ、

如來の願船いままずば、苦海をいかでか渡るべき、

此の和讃の通りである。先づ第一に自分の罪惡を自覺して

偉大なる悲願を喜ぶより外は無。斯くして一人々々の胸中

へ佛陀が誕生して下さる。佛降誕の歡喜は幾度も言ふが、決

して形が主ではない、心の其邊を慶ばせて貰ふのである。私も

昨日は午後は廻向院へ參詣し、夜は去る處で小數の老人達と

共に喜んだ。また午前には學舎の諸君と共に佛前にて歡喜鈔を

輪讀致し、今年は可成靜かに此の心持ちで慶ばして頂いた。

此の誕生會に遭ふた已上は。御互に更に喜びを新に行き

たい。所謂日々に新らたにして進み度いものと思ふ。此の目出

度き日に際し、特に前の文を拜讀すると、自から意味不盡の

感がある。囚人は鎖より釋され、地獄の火は滅し、人々は皆

親切に語る。こは偉大なる佛陀の御心の現はれてある。一家

一國の平和も慥か是れより來ると思ふ。現時日露の戰爭はあ

まりに大きいので今に於ては何とも謂ふ事は出來ぬ。乍去其

中に平和の仕合せが來れば、日本全國に渡りて、平和を望む

の心が、勃然として起るに違ひ無い。前にも申した如く國家

の戰爭と雖も元はやはり個人の争ひと同じである。強ちに露

西亞計りを惡いと思はずに、我が國人も修養を重ねばならぬ。

四月は學校の卒業期で、高等師範、高等女子師範の方々も

夫れ／＼皆地方へと出懸けられる。東京を去つて地方へ趣か

れて見れば、亦意外の邊に於て信仰の力を感ぜらるゝ事であ

らう。今後は猶ほ一段と修養に進まれ度い事である。猶ほ又

引き續き御滞在の方には彌々佛陀の道に勵まれ度い事と思ふ。私も昨日は斯様の考で、獨り靜づかに慶こばせて貰つた。昨日はなど申して居るのはまた實に勿体ない、毎日々々いつても歡ばねばならぬのである。

我等は如來の子なり

(第二求道會講話)

今日の題は涅槃經の中にある文から出したのであります。度々申上げた如く此御經の中には、彼の阿闍世王か自ら眞實の親を殺すといふ不幸の罪を犯し、それか爲めに非常なる苦悶に陥り、然るにそれか縁となりて遂に佛陀の慈悲を戴いて大安慰を得られた事實が説いてある。其中に阿闍世王か正しく大安慰を得られた時に佛を讚歎する爲に作られた偈頌が出てある。如來一切の爲に常に慈父母となり玉へり當に知るべし諸の衆生は皆是如來の子なり、世尊大慈悲は衆の爲に苦行を修し玉ふ人の鬼魅にくるはされて狂亂して所爲多きか如し云云。此文の中から取たのであります。其意は如來は一切の衆生の爲に慈悲の父母である。一切の人は皆佛の子である。世尊大慈悲を以て一切の衆生の爲に種々と苦しみ心配せらるる有様は丁度人か鬼魅等の爲に迷はされて狂亂の所爲を爲すのと同じ事である。親か子を思ふ實情の爲には隨分狂亂に陥る事であるが、今は佛陀か我々衆生に對する切なる慈悲を深く感ずるの餘り作られたのか此偈頌である。今日は此言葉の

意味から佛の御慈悲を御話して見ようと思ふ。

佛の御慈悲を感ずるには種々の方面から感ずる事か出來よ

うか、最も適切に最も有難く戴けるのは親といふ考からであ

る。此前の講話の時に私自身か苦しんだ當時の様子を申し上げ

た事であつたか、實際苦に陥て居ります時には多くの人が

種々と慰めて呉れ話しても呉れませんが、それは暫時の慰安

で到底絶對の安心は得られませぬ。絶對の安神は最後に佛の

慈悲によりて初めて得さして戴く事が出來るのであります。

此味は「信仰の餘瀝」の中にも書いて置きました。佛を常に慈

悲の塊と申しますが、全體慈悲といふ事は説明する事も何うす

る事も出來ないもので人々が各自に心の中に感ずるのである

といふより外に説明の仕方がありませぬ。慈悲とは斯様く

のものであると明に説明の出來る程のものならば到底大なる

慈悲とは申されませぬ。唯私が味はして戴た上から申して見

れば佛の大なる慈悲はこちらが如何に曲て居ても如何に違て

居ても、曲て居れば曲て居るだけ違て居れば違て居るだけ佛

は深く同情を以て向け下さる。又こちらの邪推が深いだけ佛

は益哀をかけて下さる。此様な大なる慈悲は何といへば宜い

か全く充分に言ひ顯はすべき言葉がない。そこで先づ親とい

ふのが最適切であらうと思はれる。我々が親の慈悲を感ずる

時そこに決して道理や理屈はない。人生上に於て人が何故に

苦しむかといふと大底は理屈やそんなもので苦しむのではな

い、實際苦しい難義な事は多く普通の狀態にある人の察する

事の出來難い處から來て居る。或は其人が苦んだり悲しんだ

りして居る事柄が假令他の人から見て如何につまらなく見え

ても苦しむ本人に取りては實際重大なる事件の如く感ぜらる

るので、最甚だしくなれば命の有無もかまわぬ様になる。そ

んなら其苦んで居る時は自身の考のみが正しいので他の人の

云ふて呉れる事は皆非であると思ふて居るのかといふとそう

でもない。つまり苦しむは道理があつて苦しむのではなく、唯

止むを得ず苦しむのである。そこで苦の極になると是非曲直

を判別するといふ餘裕ある力がなくなる。夫故に此場合には

びし／＼道理を以て説きつけられるより唯こちらが惡るけれ

ば惡るゝに従ひ、善ければ善いに應じて同情を表して呉れる

人が得たい、苦悶中かゝる人に出遇ふ程うれしい事はない。

又此場合にはそうするより外に仕方がないのである。斯くの

如き場合にあり斯くの如き慈悲を以て、能く一切衆生の苦を

察し一點の餘裕なき處まで同情を垂れて遂に絶對の安心に導

いて下さるのが佛である、阿闍世王は父王頻婆沙羅を殺し、

後自分の惡るかつた事に氣がつくと心に悔熱を生じ、躰中に

瘡が生きて臭穢にして近づく事が出來ない。母后も亦心配管

ならず種々の藥を以て塗て見らるゝけれども、瘡は漸々増す

のみで少しも癒らない。そこで臣下の者等も王が顔色焦悴、

首髮蓬亂、非常に苦惱せらるゝ様子を見て種々に説き慰めた

が、王は更に安神する事が出來ぬ。最後に耆婆といふ人が王

の所に行て言ふには大王能く安眠するを得るや否やと、王が

答へらるゝには、我は無辜の父王を殺す様な大罪を犯した、

今は後悔の苦に堪えられない何うして安眠する事が出來よう

ぞと。耆婆其言を聞いてそれで宜しい／＼。王は罪を作られ

たけれども已に心に重悔を生じ然も慙愧を生ぜられた。此慙

愧こそ能く大王が苦悶より救はるゝ所以である。早く釋尊の處に行つて救を求めらるゝがよい、其他の者は到底大王の苦を救濟する事は出来ませぬ。といふて居ると忽ち空中に聲あつて汝阿闍世、今耆婆の言に隨つて決して邪見六派の臣に耳をかすな、佛は今將に涅槃に入り玉はんとす、早く趣て教を乞へ。王は此空中何處よりともなく來れる聲を聞いて、怖懼戰慄、驚いて其聲の誰なるかを聞かると、吾是汝か父頻婆沙羅王である。王は此答を聞いて遂に悶絶して地に倒れ、身拵更に甚しくなつて、冷藥を用ひて見ても少しも効なく何とも仕方なき有様であつた。然るに此時佛は阿闍世王の爲に月愛三昧に入りて大光明を放ちて阿闍世王の身體を照さるゝといふと其光實に清凉にして、不思議にも世王の身悉く癒つた。世王大に驚いて耆婆に其理由を尋ねらるゝと耆婆が答へていふには、王先きに此世に於ては能く我病を療治する良醫かといはれたから世尊斯くの如く大光明を放ちて先づ王の身の病を治され、これより心に及ぼさるゝのである。王又更にいはるゝに嗚呼佛の慈悲は其様に大なるかと。耆婆はそこで譬へを出して、茲に一人の親があつて七人の子を持つて居るとする、若し其の中の一人病に罹る時は、父母の心は是等の子供に對し可愛さは毫も異はらぬのではあるか、然も特に病子を哀れむ。佛亦如斯一切衆生に對して平等の慈悲を施さるゝのであるか、罪惡の人に對しては殊に憐み玉ふのである。如斯阿闍世王は耆婆の言を聞いて、それから釋尊に親近して種々と説法を聽かれた。佛仰せらるゝには、汝は今罪あり〜と歎いて居るが、決して歎くに及ばぬ、何せかといへば汝の父

頻婆沙羅王は常に諸佛を供養して、諸の善根を種へて置いたから王となつたのぢや、諸佛若し其供養を受けられなかつたならば、汝の父は王とはならぬ、王とならなければ汝の爲に致さるゝといふ事もなかつたのである。然るに諸佛は實際供養を受けて王と爲らして置きながら、今汝か其王を害したからといふて、諸佛が捨て、汝の罪を救はないといふ事あらば、そと諸佛に更へりて罪かあるのぢや。それであるから汝は如何に罪か深いといふて心配しやうが、諸佛は決して汝を見捨てられぬ、必ず救はれるから少しも心配するには及ばぬ。佛はかく直に説かれたものであるから其時阿闍世王の心中には實に言ふべからざる感謝の念か揮々として湧いて來て自ら言はるゝには、我は是迄伊蘭子から伊蘭樹を生したのを見たか伊蘭子から梅檀樹を生したのを見なかつた、然るに今日初めてこれを見た、伊蘭子とは我身であり、梅檀樹とは即我心無根の信である。無根といふのは我初め如來を恭敬する事も知らず。法僧を信する事もしなかつた、これこそ無根の心であつた。若し我今世尊に遇ふ事か出来なかつたならば無量阿僧祇劫に於て大地獄にありて無量の苦を受くるのであつたが、幸に今佛に遇ふ事を得て佛の大功德を以て全く救はるゝ事が出来たと。そこで佛はいはるゝには、汝は最早能く衆生の惡心を破壊する事を知つた。阿闍世王か又言はるゝには、我若し衆生の惡心か破壊出來るならば、我は常に阿鼻地獄に在りて無量劫の中に諸の衆生の爲に苦を受けても更に厭はぬ。實に一旦己の罪を自覺して苦の爲に一刻の餘裕もない迄に至りた阿闍世王が佛の救濟を蒙られてより後は非常なる安慰の

境に達せられたものであるから、摩伽陀國の宮臣初め無量の人民は皆菩提心を起した。前に申上げました偈頌は此時に出來たものであります。此偈頌は實に味あるものであつて種々の方面から味ふ事が出来る。全體世の人が苦んで居るのは何の爲に苦んで居るかといふと、或は理想的の境遇に處せんとして苦しみ、或は親を憎み世間を怨んで苦しみ、兎に角苦の狀態は澤山ありますが扱是等の人々が佛の救濟に會ひて安心の境に入らるゝのは爾う澤山の道かあるのではなく唯一とつである。そんなら其道は何ういふのであるかといふと、例へば此間信仰を得られ人の中で或人は信仰を得る迄は、酒を飲んだりして實に不真面目であつたのが一度佛の御慈悲といふ事に氣がついてからは全く夢の覺めた様に身持がなほり、今では佛の廣大なる慈悲を喜びつゝ日暮をして居らるゝ。或人は平常から家庭の上に理想を待て居られたのが何時も親に妨げられる爲め理想を破られ、何うも面白くなく苦んで居て、つい其間に親を憎む心が起つたが、私は此人に會ふて誠に人生上の事は理想通には行き難い。我等は誰は善い彼は惡いと種々に言ひ争ふて居るが大なる目から見らるゝ時は、實に小さな事で争ふ程の事でないのである。誠に如來の御恩といふ事をば、さたなくしてわれも人も善し惡しといふとをのみ申しあへり、聖人の仰には善しと思召す程に知り通したらは、善きを知りたるにてもあらめ、如來の惡しと思し召す程にしり通したらは惡しきを知りたるにてもあらめと煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、萬の事皆もて空事たわ事誠なきに唯念

佛のみぞ誠にあはします云云。實に此御言葉の如く善とか惡とか何といふても人間のいふ事は少しもあてにならぬ。かくあてにならぬものを以て争ふ心の起りた時は須らく仰て蒼穹を望むが宜い。然らば如何にも己れか少さい事に關係りて腹を立てたり苦んだりして居た事がわかるであらう。理想通にやろ〜と思ふて居る人と雖も皆己が善いとも限らぬ。それであるから何をやるにつけても、大なる御慈悲に引きもたされつゝ進まねばならぬと、種々申して居ましたか其人は不圖こゝに氣がつき、それからといふものは親に對する所か全く一變して、是迄は唯親が惡い〜と思つて居たのが實は自分か惡かつたのであると懺悔をせられて絶對の慈悲に據らるゝと從來の苦も自ら消え去つた。或人は其人の境遇の上から自分は絶えず親に心配をかけ不孝ばかりして居る、實にすまない。然し乍ら何うかして孝行がしたい、親に安心か得させたいと思つて居ても何うしても思ふ様に出來ぬ。仕方がないからいつそ死んでしまふ方が善い、それが更て孝行であるとかへて已に死なうと決心せられたのである。此人に對しても私は唯佛の大なる御慈悲の事を説きました。最後に親に對して濟まない〜といふて御座るが、そんな事はもういふに及ばぬ。殊に汝か死んでまで親に孝行かしたいと念願して居らるゝのは是已に佛の大なる慈悲でないかと申て別れまして。此間其人は大なる安神を得られたといふ事を聞きまして私も大に安心致しました。是等の例にしまして何れも信仰前に於ける事情は夫々異りて居ますが、最後に佛の慈悲といふ處になると皆一とつである。如來は一切の爲に慈父母と

なり玉へり、一切の衆生は皆是如來の子なり。如何なる善人であらうが惡人であらうが、一度親の慈悲に歸つた時には更に差別はない。親鸞聖人の見方が全くこれである。彼の觀經には人間の信仰に入る階級を九通りに分けて説いてあるが、是は唯表面の差別をいふたもので救濟の最後の處は皆慈悲の一つである。親鸞聖人は此大なる力大なる慈悲を説かれて、然も己の心中を遺憾なく表白して廣大なる慈悲を説いて居る。即我こそは表には賢善精進の相を現して居るが、願みれば、無始曠劫よりこのかた乃至今日今時まで汚穢不善にして毫末も清淨の處はない。然るに佛は一念一刹那も清淨ならざる事なく眞實ならざるはない。是等の慈悲は此世に於ては親に譬へるより仕方がない。此世は理窟で行かぬといふ事は親に對して最よくわかる、子が曲れば曲れるだけ、悪ければ悪しきだけ、親は可愛かり不憚に思ふて下さる。前申した阿闍世王の如きは實に其の親を殺したのである。然るに子か先非を悔みて非常なる苦に陥れる時尙これを救はんとして、佛の前に導かんとして最も力あつたのは正しく其父王の聲であつた。而して此逆惡の王を全く苦より救濟せられしは、又阿闍世王か提婆と共に一旦は迫害を試みた佛世尊であつた。如何なる罪惡の人間であらうとも佛は親と共に最後まで相從ふて遂に救濟せられぬば止まぬといふのである。度々申す事であるが此阿闍世王の經驗は實に能く信仰の經過を表はして居る偉大なるものである。私も苦しみました時には夜に寝られぬ、食物も餘り食へませぬが食へても味がなない。恰も阿闍世王の様である、丁度其當時に身に腫物が出来ました。實際苦しむ

ます時には種々の病が出てそれか又苦の種となるのであります。涅槃經に佛が阿闍世王の罪なき事を説かるゝに、四狂といつて貪狂、藥狂、哭狂、本業緣狂等の如きものは如何に惡を作りても、我佛は決して夫等の者を戒を犯したものとせぬ、阿闍世王は即此貪狂である。決して罪はない。又諸佛は汝の父類婆沙羅王より嘗て供養を受けて居る、供養を受けなから若し救はないといふならば佛は更りて罪ある理である、といはれた言葉をも申ましたか一々其人の心に應へた様でありました。扱私は病氣が癒はると共に苦もなくなつて病院から歸る途中大空をなめました時の嬉しさは何ともいへなかつた。彼の曇鸞大師の傳を見れば直ぐ解るか、曇鸞大師が佛敎を研究せられて大集經を讀まんとせられた時、其詞義中々深いものであるから非常に苦心をせられた。處か途中氣疾の爲に暫く研究を中止して轉地療養をせらるゝ事になつてやがて汾洲の秦陵の放鳩に來て城の東門に上り大空を望まると忽天門か洞かに開いて六欲の階位か上下に重り合ふて居るのを歴然と觀られて、それから病全く癒えて又再び經文の研究に従事せられたさうである。かゝる現象は隨分昔よりあるものと見える。私の苦んだ時親は眞に見兼ねたものと見えて、若し子の病に親か代りてやる事が出来るならば代りてやりてやりたいといはれたが、今思ては非常に有難い。又母親の如きは終始病院で詰めて居られて日夜看護せられた、此兩親の慈け深いにも係らず私は病か苦しむものであるからそれをも忘れて親に心配をかけました、最後に腫物を切開した後で大聲で呼んで親に心配をかけました誠に狂氣の如き有様でありました。

それに親は益恤はつて呉れました。平生は何とも思ふて居らぬが親は實に有り難いものである。苟も人ならば如何なる者でも親を思はぬ者はない。前講に申した囚人も聞いて見れば親の事は決して忘れない。前講話にある囚人が言ふのには、私は十三歳の時家を出ましたが其時母が私に一の佛を呉れましたが其當時は一向佛法氣がなかつたものでありますから打ちやつて願みもしなかつたですが今日信仰を得させて戴てから考へますれば、母に對して實に申譯もありませぬ、殊にかういう處に居る事を思ひますれば耻かしくてなりませぬと。實に眞情であります。兎に角いかなる人でも一度慈悲に感泣すれば、等しく如來の子となるのである。親鸞聖人は此慈悲を説き、而して此慈悲によりて救濟せられやがて佛の世界に至れば再び此世に來りて濟度せられ得るといふ事を説かれたのは是れ大なる味のある處である。我々は誰も肉の親の愛情を知らないものはないけれども尙一步進んで、其肉の親の根底たる絶對佛陀の親の慈悲を知らざれば絶對の安心を得る事は出来ぬ。肉の親の恩の大なる事も亦それから知らるゝのである。如斯感した上は最早普通の親として自分の親を見る事は出来ぬ。私は昨年その死に遇ふて未來の世界に一層高尙なる理想のある事を深く知りました。かく私をして此絶對慈愛の親を知らしめん爲に導て下さつたのは私の此世の親である。親の慈悲は實に極りないものであります。世の人は唯佛の慈悲を親に例へたのぢやと冷かにいふが、實は肉の親の慈愛を眞實に知る事の出来るのは此大なる佛の慈悲からしての事である。御互に苦しむて居る間は何も解らないが一度佛の慈愛

に接して見れば、是迄は何うも親に對してすまなかつた、親に孝行をしたいと思つて居ても何うも思ふ様にいかなんだ杯と種々に我考を廻して居たのは自分の力で孝行が出来ることの様に思ふて居るのが悪かつた。自分は孝行者の様に思ふて居るのが間違である。吉田松陰が獄屋に繋留せられ將に刑に處せられんとする其當日に親を思ふて作りたといふ歌がある、親をねもふ心にまさる親心、今日のおとづれ何と聞くらん。實に肉の親は如來大悲の親の心を事實を以て教へて下さる方である。人生上には種々の事變もあらうが、彼の王者城の悲劇の如きは最大なるものであらう。親鸞聖人は之を、此世の惡人が救はるゝ一大事實であると見られた。それでありますから教行信證の一番初めに、然れば淨邦緣落して調達闍世をして逆害を興さしめ、淨業機彰はれて釋迦草提をして安養を選はしめ玉へり。斯れ即權化の仁、齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲、正しく逆誘闍提を惠まんと欲してなり。と仰せられた。かういふ人生觀は各人の心に引きくらべて見れば自ら了解する事が出来る。能く考へて見れば人世のすべての出来事は如來が我々に大宿題を興へられたのである。其大宿題は如何にして説けるかといふと皆佛の慈悲を戴た上から解かれる。此佛の御慈悲を戴く上について我々が最も誠むべきは疑といふ事である。疑は實に一切のものより光明を奪ふ所のものである。而して一切の疑の中で最も大なるものは佛を疑ふ事である。これを親鸞聖人は和讃に、不了佛智のしるしには、如來の諸智を疑惑して、罪福信し善本を、たのめば邊地にとまるなり。佛智の不思議を疑ひて、自力の稱念のむゆ

へ、邊地僻處にとまりて佛恩報する心なし。佛智疑惑の罪により、懈慢邊地にとまるなり、疑惑の罪の深き故、年歲劫數をふる」と説く。疑は人をして大なる罪に導くものである。然るに此疑を解いたならば人生上の苦は自ら解る。信仰以後でも佛を忘ると速く苦みに陥る。然るに佛陀の慈悲は長く此苦みに止まらしめず又舊の如く安慰の天地に引くものとして貰ふ事が出来る。これによつて益佛の大なる力を感じさせて戴くのである。今日は佛は親なりといふ事について種々の方面から申上げました。倫理的に親といふものを見て居る間は味が浅いが、かく絶対佛陀の慈愛を信する信仰の上より見る様になつて初めて親の慈悲の大なる事を感じる事が出来るのであります。

實 驗

黒田最勝君と哭す

近角 常 觀

私は信仰の友黒田最勝君を慟哭いたします、私は此世の交際としては黒田君とは僅かに二回の面識であります、然れども信仰の友としては無二の親友であります、既に四月十一日に逝去されましたれど今猶私は心中に於ては親しく話しつつある心持であります、然るに私は此の如き信仰の友たる黒田君が死せらるゝとき御世話することが出来なかつたばかりではなく、死なれたことすら十日程後に知つた次第であります、此事ばかりは實に遺憾至極で、恐くば一代の間思ひ出すこ

れつゝある様子で申さるゝには今日は甚だ感情が激しくなりて居ります故再び御伺ひ致して御話申します」といひて、かつ「私は經論釋につきては一應研究を遂げたものであります、又身は佛門に生れ佛の御養によりて成長したものであります、今迄或は教員となり、或は記者となり、兎角佛教に對して善き感情をもつて居りませぬだ、それにもかゝらず、かく佛陀無限の大慈に浴する事を得ましたのは何たることありませうか、私は今迄是れが解らなんだと云ふは残念でたまらぬ、實に祖門の罪人でありませぬと涙を流して實に沈痛なる懺悔をなされました。

かくして黒田君は辭して去られました但其の跡を見れば懺悔を以て濡つてあつた次第であります、私もイロ／＼信仰家の告白を聞きたれども、此の如き著しき事は始めてなれば、甚だ感動してジツとして居られず、直ぐに君の後を追ひかけて「明日求道學會の日曜講話なれば、その席に於て告白して頂き度し」と申した處、君は現今砲兵工廠の役人を勤めて居る事なれば御受合することは出来ませぬが、今のうち必ず参りますと云ふて別れられた。

一週間は講話毎に同君の事を話して人と共に喜んで居りました、その次の日曜即ち一月二十九日の、求道學會の講話の題に「佛陀無限の大慈」といふ君の云はれた言葉を出して話しました、當日は殊に多くの参聽者でありまして講話室は勿論餘程まで人があふれ深山庭の内にも立つて居るといふ有様でした、終り頃になりましたと誰れか障子の外に居て歎息して居る様子で、その聲が私の耳にヒシ／＼と響きますので私も堪へられぬ様でありました。講話がすむなり障子を閉きで入りて來つたのが即ち黒田君でありました。此日は最後の日曜日として例のごとく信仰談話會のある日故、直ちに會に移ることになりました、私は同君に告白を求めた、君は前日とは頗る様子が變つて居て、非常なる自信を以て打ち立つたる様で、イハ／＼眼中人なしと云ふ勢でありました。こは信仰に入つた當時にあり得る現象で、何人も先づ非常に罪惡觀にうたれて懺悔の念に満たされ涙に堪へぬ時期があります。それが暫くすると非常な歡喜と自信力を生ずる様になるのです君は實にこの後の有様でした、まづ私を凝視して頗る眞面目なる態度を以て云はるゝには「建仁第三の曆春の頃聖人二十九歳、隱遁の志に引かれて深空上人の吉水の禪房に尋づね参り給ひき、先生實に此の言葉は私の現今の境遇をうのまゝ云はれた様におもはれます、時は六百年前、處は吉水の禪房であります、私が先

とてあるうと存じます、又之を思ひ出すときは自分も宗教の爲に努力することが出来やうと存じます、此意味に於ては黒田君のなさられたれば即私の爲には非常なる刺撃でありまして、同君のことを思ひ出せば、たとひ法の爲に一命をすてたところが何んであるかと云ふ様に非常な奮發心が出てくるのであります、是は私ばかりではなく本年一月廿九日求道學會の信仰談話會に列席された人々即同君の信仰の友たる百五十人程の人々に對しては、私に對してと同様な刺撃があることと信じます、又其席にあらざりし讀者諸君は下に私が述ぶることによりて黒田君の信仰の如何なるかを知りて此文字によりて諸君が信仰の友たることを知り又實に永久の友たることも御承知下さることが出来るも確信する次第であります、私はかく書きつゝある間にもドーしても同君が死なれたとは考へられないので同君が非常なる元氣を以て信仰を告白しつゝある面目が躍如として私の眼中に映り來るのであります。

本年一月二十一日であつたかと思ひます、九段坂佛敎俱樂部に於て第二求道會講話を致しまして、講話がすんで、丁度私が席にかへりました時、参られた一人の方がありまして、木綿黒敷附の羽織を著し、袴をつけ、片手に皮製の書類入をかへ、片手に一ト輪の珠數を持ち、頗る眞面目の態度を以て入り來り、先づ佛前に向て嚴肅に禮拜をせられて、深き感動を以て頭をさげ禮をすまし、私の前まで進んで來られました、此時私、他の學生の方に話をして居つた間待つて居られて、其人が去つた後私に挨拶をなし、アナタは近角さんでありますかと尋に、左様で御座りますと答へたとき、下に兩手をつき、實に全身こめて非常なる感激の聲を以て「先生佛陀無限の大慈は今日まで分かりませぬだ」と告白するや否や、忽ち雨の如く涙が落ちて登の上を濡された、私は其有様の非常なるに打たれて、又私も同様に兩手をつき、暫時無言で居りましたが、如何にも黒田君の御様子に一點の私なき有様を見て、佛様の御力があり／＼見えるので、私も同様に感激に堪へず、黒田君に申し上げるには、如何にも佛陀無限の大なる御慈悲は鐵壁に堪へない次第で御座ります、そして我々を知らずに居るのが、之を知らして頂くには色々の場合がありまして、其次第を知らして頂くことは最も難有事と存じますが、アナタがかく迄も佛陀の御慈悲を頂きなされたのには必ず著しき動機がありませうと存じます、そのことを承ることを得るならば私の爲にも又信仰を求むる人の爲にも非常にありがたき手引と存じます」と答へたる處、非常に感激せら

に九段の求道會に先生を尋づりましたのは實に全く同様であると考へます、かく云へば何か自分を宗祖大師に比する様で恐れ多い様ですけれども、時は恰も春の頃、私の年齢は恰も二十九歳、始めて宗祖大師の御跡を慕ひし佛陀無限の大慈を頂くことを得ました」と何とも形容しがたき力ある眞面目なる、しかも喜ばしげなる語氣を以つて口を開かれたる様子は今猶躍如として目にみえる様である。

次いで云はれるには「全体私は本派本願寺の大學寮を卒業しましたもので、抑誤の根本と云ふは天台、華嚴等の教理を研究して佛は眞如のことである、宇宙の眞理を云ふたものである、それを愚俗共に解り易き様に、十萬億土の極樂であるとか、阿彌陀如來であるとかときたもので、我々知識を有する者には一文の價値もないと思つたが迷の本である、全體人間の理屈をこの上なき確かなもの、何にても解かるものと考へ、二十世紀の科學哲學を天上の眞理と考へたが大なる誤りであつた、かく考へた結果佛陀が少しも有り難くなくなり、自分で有り難くないものを人に説いて居ると云ふことはトテモ出来ぬ、そこで断然僧侶を去りて流浪し始めた、或は中學教員となりて佛敎渡來の事を説くに至りて口を極めてこれを罵り、又新聞雜誌に筆を取ることあつたが、未だ一度も佛敎に對して善感情を懷いたことはありませぬ、かくいふものゝ何となく心が寂しくなりて堪へられぬ様であつた、時々國へ歸つて見ると、稚き妹が佛前に於て合掌して、如何にも心から嬉しさが溢れる様子を以て御跡をあげて居るのを見て、なぜ自分もあの様になれぬかとおもふて頗る心苦し、又甚だ羨やましかつた、それゆゑ歸國することが何んともいへぬ苦しい、いやな心持であつた、それから段々佛様に遠ざかりまして遂に法律學校を卒業し、官吏にならんと欲して高等文官の試験を受け、豫備試験に及第し、昨午本試験をうける爲に上京して見事落第したが幸ひ、もしその時登第したならば今頃は大得意になつてどこまで増長したかわからぬ、それから以後は頗る苦境に陥りて國へ歸ることも出来ず、東京に暮して居りましたが、先生實に値づかなことが動機となりまして永い迷ひから醒めましたのです。

本年正月四日妹から手紙が参りました、その終りに「兄様人間の智慧はだめてすからすて下さい」と一言かいてあつたが氣のついた本でありました、嗚呼成程人間の智慧はダメである、今迄自分の智慧を偉いものと思つて居たが大なる間違であつた、考へてみればこの妹の一言は私の爲には實に大善智識であつた

それから振りかへつて見れば今迄思ふて居たことが残念でたまらない、そこで法律の書物を昔な油をかけて一時に焼いてしまつた、そして六字尊號と書いたのを床の間に飾りて勤行を始めた、宿のものは気が違つたのでないかと非常に驚きました、それより後九段へ参り懺悔をした次第であります、ツクム考へてみれば佛物を以て成長しながら、佛様の悪口をいふた大悪人御座います、故に佛様にむかふと非常に懐かしい様な、また恐ろしい様な感じがいたします、自今以後粉骨碎身佛法の爲に盡さんことを誓ひます、さうせれば實に濟まぬ、私の兄は京都の深草に玉日の宮の墳墓のある寺を再興するのを一代の任として居りますが、私がそれを引うけて深草に越くつもりであり、然し私は本堂を建築する様な物質的のことを致しませぬ、飽くまで先生のおやりなされてあるやり方に準じて新らしき傳道を致さうと思ひます、といふて、それに求道會といふ名前を用ひさして載くことは出来ませぬかと却られた。私は君の様な全く同一の主張を以て同一信仰の人が實着におやりなさる以上は、うれに求道會の名を用ひて相提携して行くことを樂しみますと答へしに、同席の荻野君は深草求道會と名づけたらば頗ぶるよき名前ならんとて、心から賛成して居られた。黒田君又云はれるには私はまづ第一着の仕事として、私が志ある人々に話して「求道」を毎月一人一部づゝ寄附してもらひ、五百人を募り全國の停車場にこれを備へつけ様とおもふ、實は先日より腸胃カタルにかゝり病床に呻吟して居る中にも、旅行案内を一冊買つてもらひ、全國の停車場の敷を調べてみたが、大抵五百部あれば十分の程であり、病氣さへよくなれば直ちに京都へ行く積りですが、イヨ／＼求道會の開會を致します時は先生に御出願ひますと。

散會の後もなほ幾つて暫時信仰後の感語をなされましたが、その時はさほどのことにはおほみせんでしたが、あとから思ふて見れば、君のこの時の話にはほど意味の深いことであつたことを發見いたします。君のいはれたことのうちに「そのうち私がウヌ承知ならぬと思つたことがありましたか、もし信仰以前ならば何をしたか解らなかつたに、その時フト宗祖大師が山伏袂間を風化せられたことを氣づきました、袂間は聖人を殺さんと企てたのである、うれてさへ「襟顏にむかひ奉つるに、苦心忍ち消滅して剩さ（後悔の涙禁がたし）」といへる次第である、然るに私を殺さうと考へたるでもなし、宗祖大師にくらべて見れば何でもないと考へるや否や唯わか後から私の袖を引く様な心地がしましたやへ堪忍しまし

ゆゑ私は油断して、死なれる杯とは思ひもよらなかつた。其後使を以つて信仰の餘瀝、信仰問題を送り、又自分も事に觸れ、同君の安否が氣にかゝり、今日は何かん、明日は尋ねんとおもひ居るうち、月末になれば雜誌がいがはしくなり、それが済めば國へかへり、又上京すれば雜誌に追はれ、終れば母を案内する等、その間々には諸方の講話があつて、遂にゆつくり尋ねる折を得なんだ。勿論近い湯島の事であるゆゑ、同君の病が左程であるといふことが、わかつて居れば何を置いても行つたであらうし、又現に土曜日毎に九段へ行くにも、宿をさがして必ず尋ねたであらうに、縁がなかつたといふものか、遂に先月二十二日迄行けなかつた。

二十二日九段講話のかへりがけに、今日こそはおもひ湯島館をたづね、黒田さんとは問ふた處、黒田さんとは誰の事ですか、最勝さんならば今月十一日にお果てになりました」と聞いた時は實に非常に驚き夢の様な心地になつて、とても信ずる事は出来ませなんだ。まづともかくもいはいつてくれとの主婦の言に従ひ、内に入りてその病中の事をきくに、一として涙の種ならぬはない。たゞ一言、同君の境遇を抽象的にいへば人間として人情最も忍びがたき精神的大苦痛の極たるべき境遇に居られたといふより外にはいひあらばし様がない。それにもかゝらず、同君は少しも不安の様子なく、又病苦はげしきにもかゝらず、何等の訴ふる處もなく、主婦の親切なる介抱をうけて、ひたすらこれに満足し、又同君は牛乳、玉子等の滋養物を好まぬゆゑ、身軀を養ふ方法もなく、漸次衰弱せられしよし、枕頭には六字尊號と一輪の珠數を常に離されなかつたとの、ことである。學舎へ來られた時も現にその珠數をしめして、こぼれが父が桃の種をもつて作つたものである、不思議なことにこれだけは少しも身を離さず持つて居ましたといはれた標子が目にみえる様です。そして二三冊の本も亦枕頭より離さなかつた様子である。五日は上野の實業家團体の視察會があつたので、君は強いて車にのり見物に行かれ、大層元氣よくかへられたとの事である。十日の晩に雜誌が着した時、動けぬ體を起してもらひ、室の隅の壁にたれて、それを見られたが五分間ほどしてやめられたるよし。こは確かに「求道」第三號であつたにちがひない、其夜から段々標子が變つて十一日の午前九時といふに漸次安らかになくなつたとのことあります。實に立派なる御養生であるとおもひます。國には慈愛ふかき母御も、發明な妹御も待つて居られ、又黒田君も非常に會ふことを樂し

た」とかく話しかへらるゝ時、昨年以後の「求道」を取揃へて差あげた處、大層喜ばれた。あとにて聞けば此時宿へかへられて甚だ喜こんで居られたさうです。この時既に物を食することが難かしかつたさうであるが「今日は御飯より何よりも一番おいしいものを澤山食へてきたから御膳等は入らぬ」と云はれたさうである。其後私も黒田君の事は少しも忘るゝ事なく、又同君の告白を諸君に聞いて戴きたくおもふて、同君に執筆を請ひました。當時は今から考へれば實に申し譯なき事なれどさほどの病氣と考へなだったのであります。君からきた自筆の端書は次の二通である。

「なつかしき近角先生足下本日及び昨日は求道會の美しき法の庭、定めて芳ばしく候ひしならん、僕は其後相變らず病床苦呻之人、本日も推して逢會いたし度候ひしも身は心にまかせず「今頃は定めて」なんど、考へつゝ、終日を苦しみ終り候御察し下され度候御起居伺旁御無沙汰の御詫迄

「我亦在彼攝取之中」 南無阿彌陀佛

謗法の罪人 黒田最勝

二醫の爲に意外の御無沙汰御免致下度候病氣は例に依て例の如く別段悪くもなけれ共快方にも向はず困り入り候却説今晩は御心籠りし御手紙に豫め感佩仕り候、就ては来る二十日迄に予の經驗を認めて送附せよとの御事實は兼て申上置き次第にても有之氣にかゝり居り候へ共、筆動かず、そのまゝに相成り居り候始末恐れ入り候何病中のことにて候へば到底諸君の如き長論は出来られ候へ共事實有りのみ、たけは書き記し二十八日迄に御送附可仕候然し長論は六ヶ數候まゝ此儀御金分置き被下度、兩三日中に一度推して御邪覺致度存下居り候へば餘は其節に譲り候 早々

黒田最勝

勿論此文も出来ず又來られることもなかつたが全体病氣は腸胃カタルと聞いた

んで居られたさうでしたに、おもへば、實に残念な事である、死なれたといふ電報により、母上は氣絶されたさうである。私も僅か一二度の面識とはいひながら、かくとて信じてくれたる信仰の友を遂に見舞もせなんだといふ事は實に申譯がない、畢竟愚痴にすぎないけれども、かく重い病氣であると知つたら、如何様にしても介抱し、よろこんで御世話をしたらうに、申譯のない事である。されど君自身は頗る満足の様子を以て、かくのごとく助けなき遊境にありて、大安心して入寂せられたるは、實に立派な事である。定めて今頃佛陀大悲の膝下に侍して、われ／＼職士の衆生をみそなはし給ふ事であらう。先月三十日の談話會にまた同君存生中に同く砲兵工廠に勤めて居られたる岡崎といふ人が尋ねてきて、同君の平生につきて話して下さつた。同君は本年の始め信仰に入られてから實に立派なる人格となられ、恰も前と別人の様な感があつたといふ事でした。又以上にかきた様なことは岡崎君にもみ話されたが、きけばきくほど立派である。ことに求道會の發會式を行ふ事をいろ／＼豫想して、喜こんで居られたさうである。又平日枕頭にあつた書は信仰の餘瀝と信仰問題であつたとの事である。きけばきくほど涙の種ならぬはありませぬ。驚くは諸君と共に君の志をつぎて法の爲につくしたい事と考へます。私は思ひがけもなき同君の死をききて、宅へかへる道すがら君を追懐し、何といふて嘔吐してよきか、實に氏は親御が與へられた君の名の如く希有最勝人であると考へました。本月はもし病氣がよかつたら君自身で書いてもらはうとおもふたこの告白を、私が代つて申し述べて追悼の言葉とせねばならぬといふは夢の様な心地がいたします。

▲近角先生へ

尊き御話しを黒田氏の上に承ることを得たる生は、今や、先生と同一感涙の溢れ來るものあり、古今東西、人生の舞臺は千慮萬狀を呈しあれど、ああ佛の、この廣大の慈體のものに、まこと同氏の病死をば苦痛ならしめたるがごとく、一切のものにも、永久に存在せらるること、深く佛天に感泣します（近角生）

靈蹟

五臺山探勝記

菊池 秀言

二十五日五時程を發す一路沙河に沿て行く岸時て屏障の状を成す河流淺淵なり宛かも我郷貫たる羽州最上河を踐渉するか如し寸心頓かに動て數千里外の山水を移して熟路慣識の間を徇律するの概あり心棧の轉進は其速度端倪す可らず一詩を得たり。

三騎三驢背一度沙河。前路雲披幾翠嶽。山色溪聲如舊識。數千里外故鄉過。

河盡て復た山嶺に登る路極て險阻なり飛驒の山中を越るに似たり楊柳森森水に沿て列植す村落間々蕪梨を栽培するものあり山峰を壑して水麥を種るものあり皆な灌漑に便なり行こと二十七里小澗あり石出て沙少し一石澗を發たり洞上平坦砥の如し小廟を建つ便ち驢を下て登臨するに岩石峙立して攀援する能はず驢夫の肩に跨て上る媪婆看護す何神たるを知らず行こと數里雄風頓かに起り空嶺遠く聞ふ肅然四顧驢逡巡して前まず少間にして右嶽一狼の群羊を逐ふを見る山麓野叟鞭を揚て大に叫び犴狗を驅て之を尾す蓋し野叟群羊を此に牧す放て山上に遊はしむ突然狼來て一羊を攫み去るものなり佛説の强者伏弱迭相呑嚙の状態は深山幽谷も未た免る能はざる歟慨然

蕪詩を賦す
路入三幽溪一鳥不鳴。潺湲洗耳澗泉清。深山未免塵寰累。果見剛柔刻賊情。
犴狗は蒙古種の巨獠にして其狀雄壯其毛鐵針の如し性酷た剛直夜間盜を防くを以て自ら任す終夜奔走看護す若し強賊の隙を窺ふあるや白刃叢鋒の間に入て兇手を嚙まされは已す又獵夫の爲に捕獸の用を爲す平素鐵鎖を以て之を繋ぐ而して飼養者に對しては極めて柔順にして兒女の鞭撻に任せて毫も激怒の狀を露はさずと云
十一時阜平縣に抵て午餐を喫す右奇峰翠巒を露はす山頂奶廟(道教の祠宇也)あり城壁半は頽る正定府に屬す東王快鎖を距る五十里此地溫泉二あり南五十里を温水とす西七十里を冷水とす
午時程に就く路愈よ險惡左右峰嶺岧嶢岧嶢復り隱顯懸亘せり谿路細く通して崑石林立せり色皆な黧黑にして其狀牛羊の下り飲むか如く猥貌の群り浴するか如し澗水石を鼓して其响鑿鑿たり雪浪岩を碎て其聲冷冷たり耳目の觸る所る概ね世間の表に出たり地誌の所謂倒馬關なるもの岐路險峭馬之か爲に倒るは此地方に非るなき耶予か性烟霞の癖あり本朝三四の勝概を探攬して説を爲すことあり曰く山水も亦た人類の順逆二境に於るか若き乎平坦なる大道は行歩容易にして盲者尚進むを得へし而して其見る所る率ね記するに足らず蓋し順境の世に處し易くして而も特殊の履歷に乏きも亦此に類す夫れ深山幽谷石出て水激し掛峰空を摩し恍として天梯を攀て白雲に翱翔するか若く翠巒環廻隱見出没渺茫として前後左右を迷没し若くは

幾多の崎嶇跋涉を歷て山色溪聲頗る詩畫に入り行雲流水眼窮り途盡る底の處に至ては自ら奇と呼び快と叫はすんはあらざるなり惟ふに志士仁人の身を殺して其節を成し若くは儼然大節を持して百難に遭て挫折せず或は軒然高潔山林に隱逸して而も德望嘉名一世に向るもの皆之を史乘に登せて嘖嘖稱道して千載の下に傳るに至る蓋し遊境の世に處し難くして且つ特殊の履歷に富む所以也家亂れて孝子現はれ國亂れて忠臣現はるの例も亦た此に由る歟予曾て丹後より輕舟に棹し巖巒廻岸水細くして岩峙るの間を下て蕪然箭の如く嵐峽に達す翠松紅樹隱見映發河澗く山盡る處に吐月橋を架す其風致奇は則ち奇なりと雖も規模狭少宛かも婦人女子の泣か如く訴るか如く備さに困苦を嘗て貞操を堅持するかとし岐蘇の山道飛驒の山中の如きに至ては蒙蒙得得高峰空を摩し磊塊凹凸環巒崎嶇幻怪測り難し猶ほ士人の儼然大節を持し若くは雄壯快活落落たる偉丈夫の概あり而も隱逸嘉遯の高趣に乏きを憾む豊後耶馬溪の若きは夙に人口に膾炙す奇巖怪石山水清幽采點李筆其景詩畫に適すと雖も稍や人工斧鑿の痕迹あり且つ變幻雄壯の氣象に缺るあるを奈何せん昨日以來履歷する所る深山幽谷の趣味靜邃にして仙釋の定に入るか如く太古の眞を泄すに似たり雄壯逸宕變幻の妙亦た測る可らず頃刻にして黒雲四に蔽て布穀頻りに鳴き霹靂數聲細雨漸く下る山鳴り谷應じ人をして懽焉たらしむ便ち急遽鞭を執て驢を驅る而も險路輒く進む可らず勉行二十四里但た看る洞口一瀑を噴く灑灑潭に墜て一束の碎雨に似たり地誌を按するに阜平に水簾洞あり洞口より飛下る形狀籬の如し此飛瀑に非るなき耶時方に四時三十分不老

樹村に到て泊す人戸四十阜平縣に屬す村端に不老樹蘭若神道の碑あり字磨滅して讀む能はず旁に一廟あり蓋し五臺山菩薩頂薩克大喇嘛の別業なり途上觀る所るを口吟す
谷震山鳴布穀喧。黒雲冥合雨飛盆。千條掛壁銀簾下。萬斛噴巖雪浪翻。遮路牛羊臨水飲。哮天虎虎沐流躡。脫胎換骨仙遊趣。日暮來投不老村。

此日行こと八十里

二十六日天晴寒暑表八十度早晨程を起す行こと十里龍王廟を過く人戸二十許復た行こと十里長河を渡る灘石突兀激流奔迅水驢背を浸す岸に入らんとする頃驢頭て水に倒る衣裳を濕すと雖も身に微傷なし亦た僥倖のみ僧傳を按するに佛圖澄溪に臨て腹孔より腸胃を出し洗濯して還た腹中に納ると云溪は即ち長河の源流なるへし彼は西印度より來て咒術を善し石勒兄弟の崇奉を受け其徒に道安を出して斯道漸く盛んなり我は東日域より來て闢らす長河に浴す腸胃を洗濯するの術なしと雖も炎蒸頓に去て頗る肝膽を寒かならしむ其學其德固より天地縣隔す而して微傷を負ざるに至ては偏へに佛陀の冥護に頼る還た是れ文殊大士の方便警醒したまふの意歟乃ち蕪詩を吟す

曉涉長河一倒急湍。前踪回憶膽猶寒。神通難學清腸胃。反試遊僧一浴鐵肝。

左右山嶽駢列して愈よ進めは愈よ險なり間々山頂に廟を建るを見る十一時龍泉關に入る關は長城に而して東臺の區域に屬す凡を清朝の法は要塞關門には稅吏を派して商估及來往を檢して釐稅を課す特り外國人は治外法權なれば此例に循由せず

關の東門に奶奶廟あり適々開廟の日に屬す廟前戲を唱ふ數百の男女蟻附集して立錐の地なし人戸三百許商估市塵に填塞す大盛店に投して午餐を喫す米及醬油なし政府一御史を此に駐て稅務を管理す乃ち二三の小吏を派して予を促かして稅を收めしむ予彼に告るに日本國の僧にして五臺山に朝するもの且つ各國統理衙門の執照を携帶せり御史尙疑はば宜く來て照察せよと彼等吃驚の色あり去て二ひ來らず

午時程に就く關の西門を過く長城數百里蜿蜒屈曲山に起き澤に伏す東元氏に基し南厓門關に連り北紫荆關に合す方瓦三尺壁高二丈洵とに北方の固鎖たり秦の始皇蒙恬に命して長城を築かしむ臨洮より起て遼東に至る延袤萬餘里以て華夷を嚴限するもの亦た此塞に接屬す而して長城の築設一にして足らず已業に戰國の燕代にも胡邊の要塞には長城あり降て五代に至て胡を防くか爲に互に長城を築く明朝に至て復た此舉を縱く犬牙錯雜孰れか秦代の長城なるを知らず此より山西省五臺縣に隸屬す長城嶺より臺懷に達するの道路なりとす

按するに五臺山は代州五臺縣に屬す地雁代に連り數州に盤礴す周り五百餘里左恆嶽に鄰し右滹沱に俯し北朔塞を凌ぎ南中原を瞰る實に大國の屏薄幽燕の襟帶たり古より五嶽の列位に居らすと雖も四川の峨嵋山浙江の普陀落山とを併せて三靈山と稱す五臺は文殊大士の闕宅なり峨嵋は普賢大士の住處なり普陀落は觀音菩薩の淨土なり俱に佛教聖賢の棲遲する淨境なりとす而して五臺は最も其首位に居る五峰聳峙千嶂環開繁紆盤礴頂に林木なく宛も壘土の若し五臺と名る所以なり其東西南北の四臺皆な中臺より脈を發して群嵐

至り清涼山は即ち文殊の化宇にして兼て其中に阿育王置く所の佛舍利塔あるを知り帝に奏して大學靈鷲寺を建つ爾來奉崇世と變移せず則ち高齋には寺を建ること二百餘所八州の稅を以て香火に充つ後魏の孝文帝再ひ大學靈鷲寺を建て且つ十二院を環置す隋の開皇元年詔を五頂に下して且文殊の像を塑造す唐太宗貞觀二年五臺山等の名山大刹の諸道場處に詔して齋を修すると七月同九年十一月臺山に十刹を建て僧數百を度す詔曰、朕惟、三、乘、結、轍、濟、度、爲、先、入、正、歸、源、慈、悲、爲、主、流、智、慧、之、海、音、澤、郡、生、剪、煩、惱、之、林、津、梁、品、物、任、眞、體、道、理、叶、至、仁、妙、果、勝、因、事、符、積、善、朕、欽、若、金、輪、恭、膺、寶、命、至、德、之、訓、無、遠、不、思、大、聖、之、規、靡、幽、不、察、欲、使、人、免、蓋、纏、家、臻、仁、壽、比、緣、喪、亂、僧、徒、減、少、華、臺、寶、殿、窳、戶、無、人、紺、髮、青、蓮、櫛、風、沐、雨、眷、言、凋、毀、良、用、撫、然、凡、天、下、名、山、佛、刹、宜、度、僧、衆、數、以、三、千、爲、限、代、朕、清、修、而、五、臺、山、者、文、殊、闕、宅、萬、聖、幽、棲、境、係、太、原、實、我、祖、宗、植、德、之、所、宏、當、建、寺、度、僧、切、宜、祇、畏、高、宗、顯、慶、元、年、五、月、有、司、以、勅、勅、五、臺、山、等、之、聖、道、場、地、之、僧、寺、而、稅、斂、之、得、得、而、以、肅、宗、乾、元、元、年、有、司、以、勅、勅、五、嶽、並、五、臺、に各寺の一區を建て高行沙門を選んて之を主らしむ代宗廣德元年十一月土番京師を陥る帝華陰に在り文殊形を現し番語を以て帝に授く郭子儀京師を克復するに乃て駕長安に還る詔して五臺文殊殿を修めて銅を鑄て瓦とし鍍金文殊像高さ一丈六尺なるを造る德宗貞元丙子に河東節度使李詵に勅して香を文殊殿に進め大華嚴寺の清涼國師を

聯屬す惟た南臺獨り秀て丁位に居る三伏堅冰消せず曾て炎暑なし又清涼山と名る所以也然り寒風勁冽積雪瀟漫すと雖も瑞草芳を争ひ名花競て發す洵とに形勝宏大にして清淨なる奥區なりとす其間の靈異名言す可らず惟るに其本原を徵すれば乃ち文殊師利大願の住持する所乃如幻三昧の所攝なり所謂無方無體非色非空類に觸て彰れ機に應して動く清涼山新誌に據るに縣釋を抄出して證義とす大華嚴經曰、東北方有處名清涼山、從昔已來、諸菩薩衆於中止住、現有菩薩一名文殊師利、與其眷屬衆一萬人、俱常在其中、而演說法、

又寶藏陀羅尼經云、佛告金剛密跡王、言、我滅度後、於此瞻部洲東北方、有國、名大震那、其中有山、名曰五頂、文殊童子遊行居住、爲諸衆生於中說法、及有無量天龍八部、圍繞供養

按するに支那は震那の約音にして秦の音と相似たり蓋し秦始皇の威武胡の塞外に被及し且此時既に民間には交通の道開けて外人の秦を稱するにチアンナはチナの語を以てせしを後來支那又は震那の文字を用ひし非ざるなき耶記して後考を俟つ

又大疏云、自大師晦跡於西垂、妙德揚輝於東夏、雖法身常在雞山、空掩於荒榛、應現有方、驚嶺得名、於茲土、自非大士慈雲瀾漫、智海汪洋、廓法界以無疆、盡衆生而爲願、孰能感應、若斯之盛哉、佛陀の懸記したまふ所實際に徴して顯著なり古來相傳ふ神人異跡極めて多しと後漢明帝の時摩騰竺法蘭西王より始て支那に

延て長安に入しむ是歲南天竺烏荼國王、華嚴後分梵本を進めて入朝す兼て奇香を貢ひ來て五臺を禮す宋の太宗太平興國元年五臺の稅賦を蠲く同二年勅して金泥經一藏を善隣院に送て供養せしむ同五年四月五臺山に寺を建しめ七年八月に至て落成す額を太平興國寺と賜ふ太宗以下仁宗に至る迄頒賜する所の宸章玉劄凡を三百八十軸蓋し清涼の興る時に於て盛んなりとす元世祖至元二年經藏を造て臺山善住院に送り十二佛刹念修葺を加ふ成宗元貞二年鑿興山に幸して靈現を觀て感あり萬聖佑國寺を勅建す英宗至治二年臺山に臨幸して文殊の化身恍として鏡に臨むが若きを見る王子寺に至て感あり勅して重修を爲す是年復た普門寺を創建す明永樂辛巳春梵經一藏を善隣頂に送り並びに讚序を賜る太宗御製五臺感應序曰、朕惟佛道弘深廣大、超三出三界、圓滿十方、慈悲利濟、智廣群生、然其要在於使人爲善去惡、積福修因、以共成佛道、朕取佛經所載、諸佛菩薩尊者神僧名號、編爲歌曲名經、俾人誦讀歡喜讚歎、功德之大、不可涯涘、因遣使頒往五臺散施、一至顯通寺、即有祥光煥發、五色絢爛、上燭霄漢、衣被山谷、朗曜日星、久而不散、已而復露文殊菩薩乘獅之相、始猶彷彿、及雲收霧歛、乃見獅子揚鬚吐舌、奮迅騰舞、左顧右盼、於山巖佇立、明日復有羅漢由華嚴嶺而來、或數百、或數十、接踵聯翩、翺翔其間、有頂經包者、有柱錫者、有裸體者、有袒肩者、有跣足者、有跛躄而僂者、衆至三千餘、隱顯出沒、變化非常、於時四方來遊五臺者、莫

不頂禮讚歎、以爲千載之希遇、大抵人之好善、惟在於誠而已、誠則純一無妄、貫徹內外、足以通天、地、感鬼神、貫金石、孚豚魚、雖極其幽遠、無不感通者、朕統臨天下、夙夜拳拳、以化民爲務、凡有所爲、一出於至誠、是以佛經所至、屢獲感通、觀於五臺之顯應、尤足徵矣、今特命工繪爲圖、且復爲歌曲、以系之、善信之士、可不勉乎、壬午秋帝葛里麻尊者、西土より迎ひて勅して大寶法王大善自在佛に封す師が性林泉を愛して京師に住するを樂まず乃ち鑿與旌幢傘蓋の儀を賜はり使を遣はして送て大顯通寺に至らしむ是年復た太監楊昇等に勅して育王置く所の佛舍利塔を建て並に顯通寺を脩む甲申六月より宣德二年夏に至るまで書を好覺圓通國師に賜ふもの五次、正統十年春より成化七年夏に至るまで屢ば勅して寺を建て經を送り軍民に諭さしむ成化十七年聖母の爲に安を祈り鍍金文殊像高さ一丈六寸畫佛百軸香金五百兩布帛千匹念殊萬串を臺山文殊寺に資て供養施散す是年三月慈懿皇太后勅して藏經佛像並に幢幡金帛若干を賜ふ同六月再以上諭を頒賜す弘治十二年秋、疏を製して太監周輔を遣はして五臺の文殊を祭告す正德二年秋勅して銅瓦殿を建つ額を廣宗寺と賜ふ七年春僧榮而只堅に勅して中臺頂に於て演教寺を建つ鐵を鑄て瓦と爲して之を覆ふ萬曆己卯慈聖宣文明肅皇太后の始願に因て釋迦文佛大寶塔を勅建す大學士張居正に命じて碑文を撰ばしむ是年より二十六年に至るまで藏經を賜ひ大齋を修するもの數次、二十七年春三月御馬監太

篤くして赤誠に富む信仰者たるを推知するに難からず明の太祖聰明英達神武測られず而して五臺山に賜ふ所の感應序を觀るに佛教の要を叙して人をして善を爲さしめて惡を去らしめ福を積て困を修せしめ以て共に佛道を成するに在りとし臺山顯通寺に於て文殊大士の乘獅奮迅の妙相を拜見し且曲さに羅漢の華嚴嶺より或は數十或は數百各異形を露はして聯翩翔舞するの狀を悉しく大抵人の善を好むは誠に在のみ誠なれば則ち純一無妄にして内外に貫徹して以て天地に通し鬼神を感じ金石を貫き豚魚に孚あるに足り其幽遠を極むと雖も感通せざるものなし朕天下に統臨するに夙夜拳拳として民を化するを以て務とす凡そ爲す所ある一に至誠より出づるを以て佛經の至る所には屢感通を獲たり五臺の顯應に觀て尤も徵するに足れり矣、詢とに千古不刊の格言にして當に統治者又は宗教者のみならず百般の事實皆な至誠に基く此心天地を感動し神人を交通するに至る道と求むの徒朝夕之を服膺して可なり清の聖祖(康熙帝)聰明敏知舉止端正識量宏遠至誠を以て人に接し内は綱紀を振興し外は遠略を事とし靈宇大に開け國威を八荒に炫耀すること此時より盛んなるものは未だ曾て之をあらす而して學を好み儒を崇め文學を獎勵し又佛教は祖宗以來の信奉する所殊に五臺山は北京の藩屏として之を敬すること猶し我朝平安城の比寂山に於る徳川氏の日光山に於るが如し萬乘の駒を以て三ひ聖駕を臺山に勞し西臺に於て奇瑞を瞻るもの亦た至誠の致す所るに非るなし誰か謂ふ英雄人を御するの術

監王忠を遣はして大藏一部を獅子窩に資送し寺額を賜て大護國文殊寺と曰ふ兼て勅諭を頒て供奉せしむ清朝順治年間二ひ大臣を臺山に派して祝國民佑民道場を修建す康熙年間二ひ侍衛大臣を派して香を拈り佛を禮し御筆の扁額を資送す二十二年二月聖駕山に臨む驛を菩薩頂に駐め各段に於て金銀龍緞香燭を陳供して太皇太后の聖壽を祝す清涼老人及び喇嘛に物を賜ふ差あり九月聖駕復た山に幸す時に西臺頂に於て菩薩瑞を現し祥光五色儼然たる像あり鑾輿中臺に至る比ひ方に隱る乃ち藻浴池華嚴嶺清涼石の三處を修め重て菩薩頂大喇嘛に龍袍金銀等を賜ふ二十二年四月特旨重て五臺の臺頂を修む二十三年五月御製の五頂碑文を資送す二十四年射虎山臺麓寺を創建す二十六年十二月より三十二年六月に至るまで帝及び皇太子大臣を特派して萬壽無疆道場を修建するもの數次戊寅二月朔旦聖駕三ひ清涼山に幸す五頂を朝禮し各寺に香を拈る鑾輿京に回て復た幣金を發して重て碧山殊像二寺を修む乾隆嘉慶先皇の志を紹て親く臺山に幸す而して山誌未だ備はらず其梗概を知るに由なし熟ら考るに唐の太宗德量濶大識略縱橫至誠を以て民を治め群臣の長ずる所を取て之を駕御す眞に曠古の英雄なり而して深く佛教を尊崇し理至仁に叶ひ事積善に符すと曰ひ至徳の訓遠しとして思はざるはなく大聖の規幽として察せざるはなしと曰ひ特に五臺山を標指して文殊の闕宅萬聖の幽棲なりとし且其地太原府に屬するを以て祖宗積極の安なる所なるを以て切に祗畏すべきを勅せしが如きは如何に敬虔の念に

也と未だ知らず内觀玲瓏眞信純潔して以て神人の靈感交會あるとを嗚呼至誠の道信仰の徳偉大なる哉此の如く臺山の靈蹟儼然として歷朝の外護至らざるなし現今に至て山色溪聲依然たる聖境にして諸寺の結構金碧端嚴煥然として映發す然れとも僧徒専ら朝家の眷遇と形式の末のみ拘泥して誦經參禪徒らに糊口に資り第一義を修る者少し是に於て叢林榛蒙大士の靈機隱るもの久し蓋し聖道の行證は久く廢れ淨土の信證は應に隆んるべきは彌陀の弘誓釋迦の懸記なり然りと雖も法は獨り弘らす人能く之を弘む金聲を玉振し法炬を燒耀するは果して何人にしや何年に在るか宜教に従事するもの豈大に奮はざる可ん哉思て茲に到れば慨然たるものあり(以下嗣號)

雪 塵

渡るべき橋もかすみて見えぬ野やたゞいたづらに御手に縮りぬ
悲の谷にそだちてみ光の野にはなたれておとなびにける

○ 幽 溪

榮えも知らず榮えを憶れの名もしらてたゞうららかにのみ名をたゞへむ
ゆふべ西へ薄くれなぬの暮ひきて舞ひつれる雲
我々のセザヤ
空の果てに地なる汚れ忘れつゝ戯れつゝも雲とほゝえむ

嘆 咏

春 興

左 千 夫

市川に、
上野に、
吾庭の、
吾畑の、
龜井戸に、
木下川に、
木下川の、
車もち、
椎の苗、
あすなろや、
家の前、
群植に、
牛飼の、
小さけと、
しみさびて、
皆人の、
心永く、
吾樂しまむ

桃の花咲く
櫻花咲く
いちご青吹き
菊莖立ちぬ
苗木の市たち
苗木の市たち
薬師の市に
買へるは何ぞ
松苗杉苗
楓やさかさ
家のうしろと
繁々に植つも
さちをか家は
森かよろしく
遠見もよしと
めて来るまでに
待たむ日月を

陶工の歌

紫 峽

白土の陶物ほせば紅梅の花にてりはえうつくしく
見ゆ
紅梅のさしひろごりし枝の下に板にならべて陶物
干しぬ
陶物の土こね居れば風立ちて紅梅の花はらはらに
散る
庭かまど陶物やくと火を焚けば煙のなかに紅梅ち
るも
白土の陶物ほせば黄なる蝶ひらひらととぶ其黄な
る蝶

甲 之

山吹の歌

山吹の花さき盛りかさなれる上枝は雨に色あせに
けり
山吹の諸枝の花にかぜ吹けば花吸ふ蜂もとどまり
あえず
庭めぐる椎の木立に風立ちて空に吹かるゝ山吹の
花
風強く吹きて渡れば山吹の枝押しひらけ花の散る
かも
山吹の下垂るゝ枝を吹き上ぐる風吹きくるをまち
て眺めつ

四 尾 連 湖

甲 之

緒土の山のいたゞきに
雲立つ時は大空と
かよはす湖の女神やも
下に隙かふ八重雲を
踏まして立たす。蓋しくも
夏の早にくに民の
あふきて乞ひし天つ水
雲といざよひ曉ときの
岩に凝りけむ山の上に
雲影うつす四尾連湖。

波打際の杉の下
佇めば風、尾の上越し
湖上を渡り衣手に
吹きもあえずも。かすかなる
神の息吹は湖への
日南に生ふる露の芽に
通へか、枯れて折れ伏せる
萱のあひだに寄する波
波打ち寄する水際に
春かたまけて草萌えぬ。

風も静まるま燈時

木の間に湛ふ山の上の
湖畔を一人めぐりけり。
雲の御衣は遠山を
低くおほひて掃引くや
雲のさやりに湖の面
さゝ波起る。しみ立てる
松かげうつる沖つへに
さゝ波起り石淺き
汀に波の寄するかな。

山を下れば夢をはむ
馬のいなゝき、道きしる
車の響。村出て、
水満ち足らふ田の面の
直道歸る、北山の

山の麓の吾家に
急ぐ夕の村外れ
灯火うつる橋の上
夕もやこむる中にして
知る人にあふ行きあひに。

松植込についたる
黒文字の木の黄なる花
樅の青葉にい照りつゝ、
樅二木花落ちて
櫻の若木はつゝに
はりの木がくり花さける
園の夕にたゞすみて

杉の木の間夕明り
明るき山を眺めつゝ
昨日の湖をしぬふかな。

都は花の今盛り
花の中なる都人
明日は風もや雨もやと
都大路を柳かけ
夕を花にかへる人
ちまたに満てと露水の
こもる心よふる里に
歸り来れば山めぐる
静けき園内流れ行く
河水清し夢の中。

依りて立たすや天と地
離かる曉池の波
静かに晴れて揺るゝ花
重たき花に、天つ女か
うながす玉と凝りし露
輝く朝日世に満つる
光か凝れる明り玉
輝く露よ天かけり
雲の五百重の山の上
湛はしけむか四尾連湖。

再び歸る都へは

紅塵花をおほひつゝ、
風に暮るゝ日雨の朝
こもりてあればおほしき
心、春日のきらふふごと
書を讀むにも愁のみ
まさる夕を出て行けば
吹く風寒き春の雨
秋うるほすすべなしや
ふる里野へを思ふにも。

○
大きなさげをかうぶりて
人にも語り喜ひし
時はや過ぎぬ美しき
山河いづこ。山の上の
四尾連湖と天つ雲
空行く如くしづかなる
湖の姿よ目に立てど
心の憂、ひまもなく
思へば思秋萩の
亂れてすべもなかりけり。

○
底つ岩根をくつかへし
天に逆巻く大波の
島も見えざるわたの原
搖する五百重の波の中
吾を導かずみ佛の
大きなさげよ波のまゝ
ゆらるゝわれを導かず

○
み佛かなし、朝夕に
心のすさみ風波の
絶えず命はすぎなむを。

○
そか水底に千年の
杉を埋めし、杉むらの
下に漉ふるか青なる
潤思ふ、見さくれば
朝目すがしき水の面
立つさゝ波よ山のかげ
たゞよふ沖へ、水底の
白砂見ゆる汀べに
立ちたるときにいづくしき
人の心をしめびしよ。

○
今日も日暮れて茫然と
一日一日を行く水の
夢を送りていにしへを
思はず今を願みず
人を思はず我れか身も
思はずあらんとしつれども
長ちを行くにたよりなき
一人さびしも、うつそみの
世とは思へどさく花の
散るに心の動くかな。

○
心は空に迷ふとも

○
豈忘れぬや登りつく
山いたゞきに清らかに
湛えし湖を一目見し
心のうごき。照る月の
すゞしき光我れか身を
照せしときをつかの間の
思を我は疑はず
心は空に迷ふとも
あに忘れぬや其思。

○
春の野に立つ陽炎の
夕を消ゆる人の世は
かげも止めず雲もなき
み空遍く照り渡る
清き光は我れか身を
照すと見るや果てもなき
み佛の國、先に行く
人やも、ともに手をとりて
行く吾友よみ佛の
みなさげのまゝ行かむかな。

○
一碗の茶にみ佛の
けさの吾が家は吾ながら
命思うて汲める茶に
今日の一日をかたりつゝ
たわしくありし、朝寒み
吾が身ばかりは現し世の

宇志夫

時 報

釋尊降誕奉祝の聖典

求道學舎の櫻花爛熳として雪の如く、森川町一帯花の墜道
たらむとす、げに四月八日の佛誕生日は世界到る處長へに嵐
毘尼園の春を忍ばしむ、既に諸所に公けに降誕會を營まるゝ
筈なれば、吾人は唯精神的に奉祝の聖典を營まむとす。同日
午前十時一同學舎の佛間に集り來る、讀みて清香を炷し、淨
華を捧げ、恭しく歎異鈔を拜讀し奉る、漸次輪讀して卷を終
り、次で正像末和讃を拜誦す。神聖にして靈氣室に滿つ、感
極りて涙下らむとす、勤行後ジャータカにつきて所感を叙す
講話欄に出づる如し。徐ろに佛間を退きて全體二十三人別席
にて團樂して茶話會を開き、終りて食卓を圍みて會食す、學
舎家屋に縁故深き七十九翁島田蕃根老人を招きて主賓とし、
亦幸に我母君に待して此席を開くを得たり、蕃根老人古人の
語を引きて予に説くに大幸なるを以てし、且つ祝せらる。午
後母君を奉じて、兩國回向院の大日本釋尊降誕會に參拜し、
夜有縁の老嫗に法を説く、洵に心地よき降誕會なりき。

新緑新想

都門三春の繁華空しく落花流水と共に杳然として去り、満
目の新緑湧くか如く、清新の氣天地の間に横溢せるを感じし
む。春の浮華は自ら人生の虚榮を示し、新緑の生氣人をして

自から永久の感想に堪へざらしむ。吾人此時季に遇ふ毎に未
だ曾て一段の求道心を奮起せずはあらず、吾人は近時諸所
に於ける新緑と新想を報せんかな。

巢鴨大學の信仰會

郊西遠く俗塵を離れ、麥畝十里波だてる間に聳ゆるは眞宗
大學なり。本年の春より、校内に信仰談話會を開き、毎週金
曜日授業後一席の講話を爲す、求道學舎の講話の如し。由來
宗教學校に於ては二六時中宗教の事に專注せるが爲めに却て
清新活躍せる信念を飲くの憾なきに非ず、而して今や實驗の
清泉を汲みて、先づ自家靈腑の秘奥を啓き來らむとす。吾人
は如何にも其企の眞面目なるに對して敬意を表せずはあら
ず、講後眼を放ては窓外の新緑萌ゆるが如く照怡言ふべから
ざるものあり。

高等師範の佛教會

高等師範の佛教會は一昨年茗溪の校舎綠鬱蒼たる所に開き
しが、昨年來は大塚の新校舎の綠樹中に開くことゝなれり、
丘陵遙かに植物園の森と相對し、眼下田園の新趣味を加ふ。
毎週月曜日授業後歎異鈔一章を讀みて總聖人の信仰を味ふ、
森嚴清肅の氣聽者眉宇の間に髣髴たり。

西多摩求道會

羽村の吾人か理想的信仰郷たること前々號に掲ぐるが如
し。四月十日、第五回の傳道を爲す、從來羽村に趣きたるの
時常に満目の紅楓天地秋たるの時たりき。然るに今回は大に
其趣を異にし、春山猶未だ綠ならざるも既に春草萌え出て、
野薑處々に紫を點し去り、多摩河畔の揚柳芽を生して春水肥

を來らむとす、學舎の藤井、鶴田、谷口の三君同道し、例の如く夜會場禪林寺に於て講話を爲す、多摩河畔の小旅宿に泊す、翌朝清水小三郎君來りて苦悶を訴へ、忽ち信仰に入らる、他の三君、會員諸氏と共に山に遊ぶ、予清水君を慰め、正午一同相携へて歸京の途に就き、清水君亦予等と同道して來京せらる。吾人羽村に傳道する毎に必ず新得道者を得ざることをなし、是亦不可思議の因縁にあらずや、吾人は次號に同君の告白を掲載するを得むかな。

上田求道會

最れ信州の上田に設けらる所。發起者は宮崎もと子、山極松壽子の二氏なり、宮崎氏は女子高等師範學校を卒業して今正さに上田高等女學校に奉職せらる、在京の日女子として求道學舎に來聽せられし始めの人なり。山極氏は上田の人、數年前米國に航する船中苦悶に堪へざりし時、予が信友鈴木佛氏に「信仰の餘瀝」及び三部經を示され頓に信仰に入りたるの人、昨年春歸朝して上田に在り。昨年夏予信州傳道の際、遠く飯山在に訪はれ、初めて事情を聞くを得たり、予乃ち歸路上田に立寄りて伊藤氏宅に於て一席の講話を開きたり。此時を紀念として宮崎氏と共に上田求道會を設けらる、會員は盡く女子にして其一人が今回女子高等師範に入學せらるゝに托して會員十六人の撮影を送らる。隔日一度伊藤氏宅に會せらるゝといふ、希くばかくの如きささやかにして眞面目なる會合の長へに御佛の光と共に輝かむことを、確氷の新緑、上田城頭の若葉、益々鬱蒼として多くの惱める人をして其蔭に憩はしめよ。

打たれ申候。實に淨刹の眞境目觀其色の心いたし申候、次に先年慈父病中御贈與を忝ふしたる、求道第一卷第十一號中自然法爾は信仰圓熟の極致也との一題、不思議の靈境に涉入し絶對の妙趣に接して苦悶妄執の爲作造作を超越して如來の神力海に逍遙するの趣味津々乎として溢ふるゝ感いたし吳々難有奉存候、又同號中佐々木哲郎氏の御告白書は苦悶の御實験まことに同感の極致に達し一層信念を増發したる候に御座候、次に今回御用意を奏せられて御送與を忝ふしたる求道第二卷は殊の外に感慨を催ふし實に未曾有と嘆中候其愚劣愚昧の二題我祖罪惡觀の眞境を發揮し内賢外愚の眞願を盡述して余温なくまことに惡毒深甚の痼疾に適中し拜讀數番毎に涙兩眼に浮び申候次に修養小訓にして明大に益を蒙り申候、次に信仰的理想郷なる我羽村の一題を拜讀するに至つて布教難の悲觀窟に陥入し居る野稱に取り是は阿彌陀如來の神力佛陀の加被力の豫想以外にあるを喜び又貴下信徳の感化深きを嘆慕して已まざる事、御座候、目下常に親灸を忝ふしたる慈父を失ひ身心薄弱の病僧、今日の如き教界暗澹同類墮落の社會に立つて前途遠望の悲觀に煩悶する野稱に取りては貴舎の御活動萬々添けなく噴喜無盡感謝無限に奉存候、何卒益御見捨なく切に御善訓を煩づらばし奉度御禮旁護て御願申上候、草々敬具

三月三十日

後藤 葆 眞

思へばさもしき私の心耻しく存候、これまでは唯求道歸土の最初一枚ばかりそれも意を外にして多く文にひかれて讀み候て評論の引用聖人の御言葉など穿るうろさく、その外は唯みだし丈にて傍にはふり候ひき

四月十日

京都荒神口 新らしき念佛者

▲求道學舎日曜講話題

- 四月二日 親鸞聖人の家庭 近角常觀
- 四月九日 佛誕生の歡喜 同
- 四月十六日 佛陀と父母 同
- 四月廿三日 女子信仰談話會 同
- 四月卅日 絶對の靈光 同
- 四月卅日 明信佛智 同
- 四月卅日 信仰談話會 同
- ▲第二求道會講話題
- 四月一日 釋尊と親鸞聖人 佐々木月樵
- 四月十五日 歡喜愛樂 近角常觀
- 四月廿二日 我等は如來の子也 同
- 四月廿九日 疑の罪 同
- 四月廿九日 堅剛の信 近角常觀
- 四月廿九日 父母は佛陀の權化也 同

拜啓先日は御懇篤なる御吊狀に接し感激不斜候、毎々御著手に繋る御難誌奈拜受いたし申候、先年御送與被下候求道第一卷第三號父の示寂によりて教られし眞實證の靈境、先日再び篋中より出でて拜見候處、感慨一層深く貴下の至孝を感憤すると同時に、拙稿の不孝惡毒を慚謝し無限の感に

一人にてよろこばし二人とおもふべし、二人にてよろこばし三人とおもふべし、その一人は親鸞なり」とけ御開山聖人御臨終の御訓言と記憶せり、げに法身常住なり予は御開山の永久の生命を疑はず、彌生の春の廿五日、予等淨土眞宗の門徒の相共に哭する中興上人とて亦た永久に生けるなり、現に予が上人在世の古を忍び、滅後の今を思ふて轉た戀慕の情に堪へざるものあるがときは、これ明に上人の活々として動きたまふ確固不動の證據なり、予は歴史的上人の往生の當時を追想して上人の手に成れる御文の數節を讀誦せり、幾十度となく拜誦したる御文も今日一段の有り難味を加へし事、げに奇しき事どもなり、取り別け「末代無智」の一章の如きは亦た一語を加ふべからず、一句を刪るべからず、予は我國文にて斯の如き簡潔明了に安心立命の大道を説示したる千古不磨の大文字あるをよるこぶもの候、しかるにかゝる有り難き御聖教のありともしらて、やれ哲學の、やれ宗教學の、やれ向上の一路主義のと騒ぎ廻りし昔の予れ、思へば御耻かしき次第に候、今朝の勤行に無意識に開きし所「善智識にあふことも云々の所出づ、讀みゆく内に「聖道權假の方便に衆生久しく止まりて諸有に流轉の身とかなる悲願の一乘歸命せよ」との一句あり、何等痛切の快文字を利劍亂麻を断つのおもひあり喜ばしき儘亂筆にて申上候、南無阿彌陀佛々々

三月二十五日

在京橋

某

先生吾れ此頃の境遇に對してよしなき苦しみに入りしことの耻しきよ如來大徳の眼よりみそなほしいとあはれいとしの罪の子とあはれみ玉ひしならん思へば吾らぞ罪深き者はあらざらぬ吾が汚れの心に建てし小き幻の如き理想の家庭の破られしさてかくも聞へくるししみ事の愚かさよ佛はすでに久遠の昔に吾が爲に清淨眞實なる心もて微妙妙潔の家庭を成就し給ひしに吾が慢心の眼は之に接する事を知らざりしが毎朝拜讀する彌陀經を今日は何なる宿縁の深きにや爾時佛香長老舍利弗從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀今現在說法舍利弗彼土何故名爲極樂其國衆生無有衆苦但愛諸樂故名極樂乃至舍利弗彼佛國土常作天樂黃金爲地晝夜六時而雨曼陀羅華其國衆生常以清旦と讀み來れば吾が心自から感謝の念生し清旦の氣は從て胸に満てりや、誓願不思議名號不思議なりし我が心に造作せんと欲せし小き家庭の主は亦大悲の如來にてありけり吾れ愚かにも如來の御前もは、いらず如來の家庭を左右せんとせり眞實なる御親は吾が爲に

種々なる境遇をあらはし玉ひて我に眞實のみある家庭を知らしめ給ふれ現今の境遇に接せしより愈々如來の恩徳を謝するの念いと深しく迄も如來に對して眞實にして吾を見捨て給はざりしか思へば尊とき我身かな我は如來に對して驕慢にてありし事よ自力諸尊の人はみな佛智の不思議なうたがへば自業自得の道理にて七寶の獄にぞいりにけれ吾れ今七寶の獄を出る事を得たり吾れ信仰の門に入りてより此方かくも歡喜の念に接し御名を稱ふる事なうるは全く佛智滿入の不思議と仰ぎ奉るより外なかりけり之亦先生示導の御恩とありがたく深く感謝し奉る

五月三日

在下谷

某

敬白

拜啓敢而不遜をも不顧一書を捧候陳は宿世如何なる因縁ありしか閣下の御教導に依り今日は難有生活に入り起居動靜何となく快潤に相成山谷の難路を行くも雪の夜道なたる事も偏に佛天の御用と感ず一生之間能莊嚴之句は正に當に味ひ申居候就ては昨年来思ひの儘を一句つゝ集置漸く別紙の通書附申候時も分らず歌も讀み得ぬ一發道何う偶歌なぞとほおこの沙汰には候へ共何も文辭をかざりて申候必要も無之かとも被存候まゝ認め候間何卒々々律を正し句を訂し又誤れる處を御指導被下後便に御送附被下候へば難有奉存候誠にて御多用の中を申上兼候へ共山陰の山人に憐なる一貧道を御教化被下度此段伏而御願申上候也

四月四日

大慈大悲觀世音 光明期々又輝々 普照十方度有緣 便是彌陀無限智
大慈大悲觀世音 三十三身現神通 園林遊戲住普賢 便是彌陀無限悲
本師覺王彌陀尊 无量光又无量壽 種々方便度化巧 弘誓願船繫在茲
三尊一體皆迎我 大音宣布八絃響 慈念衆生徹骨髓 男女老若悉渴仰
虛假難尋苦難我 三衣蔽得詔曲心 先慚先愧放逸身 定受阿鼻叫喚責
罪障打胸不能堪 唯仰如來救濟耳 萬感交起轉難禁 獨座寶前稱佛名
苦悶々々大苦悶 知是入信仰捷徑 歡喜々々大歡喜 清涼如月又似水
機是極惡最下者 法最善絕對不二 大悲度我無餘蘊 乃至一念接慈光
身雖山間一貧道 心在慈憤攝取中 靜誦聖經作此念 不飢不寒是佛恩
春風隨蕩花枝 鳥鳴伽陵賓伽聲 引導有情生安樂 更希世尊垂照鑑
沙門 隆 觀 白

思ひ出の記

U、N 生

新しき身玉の如き赤兒として、われ、母の膝に落ちし時、あ、がれ何のほたしぞや。
蓄き身、枯尾花の花落ちる、秋の夕へ、玉緒のまきに絶えむとする時の憂愁何の催しぞや。
罪はあはれき我等いまし、新らし、古し、よし、あしの搜索何の益ありや。
被れし窓にも月は笑まむ、清けき高き燦爛の、五彩の雲の宮居のみかば。
傾く底も夕日の金流、惜しみもあらで、天の慈澤の地、妙美しく色なすな。都、盛夏のうづ湧てるあそも何の羨みぞや。
さばれ、人の身は、苦しみ、樂しみ、交亂の麻のもつれのそのなか。暫しのほたし、いざやばらさの情のそれを。睦みの榮のそれを。ともに地にめぐりし甲斐に得なげや、いざ。
戀する淨天のみ佛よ。清き胞えのいまし降らせたまへ。
南無阿彌陀佛。

(明治三十五年五月記之)

靖國紀念

大日本續藏經

第一輯 第二輯 印度支那撰述部 日本撰述部

Table listing authors and titles for the continuation of the Buddhist canon. Includes names like 島田 善根, 前田 文雄, 高野 山延, etc.

藏經書院第二回大出版豫約募集

天入歡聲の裡に振古未曾有の大藏經出版は結了せり爰に時局の發展と共に又空前絶後の大出版を企つ即ち大日本續藏經是也... 大體 諸大藏經以外本院藏經に洩れたる各種の佛典を網羅す... 目的 忠勇死節の士の英靈弔慰の爲に其靖國紀念として發行す... 内容 珍本稀籍の絶版を回復し寫本として秘蔵に傳はれる多數の真典を含有す... 要する典籍全部に互に校訂慎重句逗又は訓點精確はり... 各卷末に壯嚴な紙幅の両面を設け一面は征靈忠烈死者の令名を奉安し一面には隨意記載の便に供す... 効果 眞段の貯蔵所 佛道精磨の資糧を無限に供給す... 参考の無盡藏 全世界古今の諸學術に關し尊嚴なる援助を與ふ... 材料の富麗地 諸般の作家之に對すれば意匠自在恣に百花を手折るが如し... 唯一の大莊嚴 安置する所即ち佛陀の在る所三寶依て紹隆入天依て善利... 文明の指南者 人文を開導し人格を組成して萬物の精華を窮む... 至便の好結塊 佛祖の眞隨在るの秘訣一座に集まりて而も低廉なる代價この無二の寶物を得 愛道好善の諸士請ふ奮つて此優曇華に俾き絶世の寶典を歡迎せられん事な

院書經藏 所行發

定價
一部十二錢
半々年分
六十五錢
一ヶ年分
一圓二十錢

精神界

第五卷第四號四月十日發行

每月一回
十日發行

◎父、來ませり◎新苦痛◎恐ろしきわが顔◎無量壽
◎至廣至深の信仰
◎史上の求道者
◎信仰と感謝

◎佛心顯現の二面
◎無碍の一道

◎花
◎九輪草
◎修驗者折伏

◎歎異鈔を讀む
◎在床懺悔錄

◎噫、赤松大勵君
◎感謝第四

◎東京だより◎新刊書
◎蓮花草◎四月八日◎花◎愛の笠
◎死後を問ふ戦地の友へ

發行所
東京府北豊島郡巢鴨村九七九
浩々洞

會我 最深
和田 龍造
佐々木 月樵
多田 鼎
安藤 州一
句 佛
武田 雪麿
美知子
曉 鳥敏
清澤 滿之
虎石 慧實
佐々木 月樵
曉 鳥敏
浩々洞

新茶初賣五月十日ヨリ 宇治茶直販賣

乍座眞正ノ宇治茶ヲ欲スル各位ニ告ク
拙家祖ヨリ製茶業ヲシテ其製法ハ地方商人ハ却テ其利ヲ得ル
位ノ需ニ應ジテ件々家業ヲ一層開放シ運送ノ便ヲ小郵便ニ代
レハ各地方商人カ山城ヨリ運送ノ便ヲ小郵便ニ代
當ノ利ヲ見テ販賣スル品ニ比シテ其價ノ廉ナリト云フ
シ多ク熱心ト然レドモ其心ヲ抽家獨得ノ製法ヲ以テ益々
平素ノ御高直ニ報シテ各々位時勢ヲ觀察シ此ノ至極ナル文明
御注文アラハントシテ

販賣手續キ
一、表中ノ茶名斤數ヲはがきニテ御通知アレバ直ニ送
品
二、代金ハ前金又ハ小包郵便代金引替トス
三、代金一圓以上御注文ノ節ハ送費ハ拙家負擔ス
小包郵便扱

茶名一斤代價表	
玉雁	三錢
折上	四錢
玉雁	五錢
折上	六錢
玉雁	七錢
折上	八錢
玉雁	九錢
折上	十錢
玉雁	十一錢
折上	十二錢
玉雁	十三錢
折上	十四錢
玉雁	十五錢
折上	十六錢
玉雁	十七錢
折上	十八錢
玉雁	十九錢
折上	二十錢

茶製造元
山城國綴喜郡草内村
古川專太郎

無盡燈

△五月一日發行
△定價一部十錢

◎哲學と心理學との關係

◎大乘佛教々理史序論

◎天臺性惡論

◎華嚴經の起處「龍宮」に就て

◎先德餘香

◎爪雪近橋

◎佛心顯現の二面

◎「我宗教」に就て

◎戰捷祈禱

◎敢て當代の畫家諸君に告ぐ

◎國民と自覺

◎教壇の空虚

◎僧侶の服裝について

◎向上的の聲

◎梵文妙法蓮華經和譯

朝永三十郎
佐々木月樵
稻葉月成
長岡務秀
南條文雄
南條碩果
多田鼎
諸同人
肅外
鳳溪
蘇月
稚樵
溪骨
玄

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の住所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

◎廣告料五號活字一行(二十七語)一回金拾錢

明治三十八年四月廿八日印刷
明治三十八年五月一日發行

發行兼編輯人 百目木智璉
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所
(電話下谷二四三三)

大賣捌所 東京市神田區神保町 東京堂
同 本郷四丁目 明文堂



前號目次

求道

◎親鸞聖人の家庭

◎信仰或問

佛陀は慈悲の塊也

喜ばれざる事によりて喜ぶ

無限の大悲は事實也

講話

◎内愚外賢

◎海の譬喩

實験

◎身治して後、心に及ぶ

近角 常觀

近角 常觀

兼蹟

◎五臺山探勝記

▲巡禮者の書簡

嘆咏

◎短歌十首

◎夜

時報

◎降誕會◎卒業期◎求道學會の昨今◎求道學舎講話題◎第二求道會講話題◎第三求道會講話

話

▲上野の半日

菊地 秀言

左 千 夫

甲 之

求道第二卷第四號 明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可 明治三十八年五月一日發行 (毎月一回一日發行)